昭和46年7月18日発行通巻19号(毎日曜日発行)　昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

朝日＝ラルース

7/18

220円

19

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(2)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。《1～64号の内容は表3参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第1号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

目　次

世界動物百科　第19号

カラーページ

表紙　ユキヒョウ　Ph. Visage-Jacana
表3　**ギャラリー**　ライオンに襲われる馬　高階秀爾

監修　小原秀雄（女子栄養大学教授）
翻訳　加藤尚宏（早稲田大学講師）

私たちの仲間

凡　例
□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注1〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について
本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100　TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3－3　〒530　TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802　TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1－3－3　〒460　TEL052－231－8131

次号予告
7月14日発売



世界動物百科
20号　7／25

カラーページ

私たちの仲間

私たちの仲間

19号……7月18日



那須御用邸で，キジの放鳥をされる両陛下

御用邸の動物たち

入江相政

那須の御用邸の裏の宿舎，そこの一室を出て，毎朝1時間ほど散歩する。本当に歩きたいのは山の中の道なので，以前には星をいただいて岡に登り，白河の関址からのぼる日の出を楽しんだもの。このごろはもうそれをしなくなった。クマが出たからである。

ある日，両陛下が山道をお進みになっていたら，少し前をあるいていた人たちが，青くなってこけつまろびつ引っ返してきた。すぐそこにクマがいるという。

一行のうちに北海道にくわしい人がいて，クマの恐ろしさを説いた。本州のはツキノワグマで，北海道のヒグマほど獰猛ではないのだが，その人はヒグマの恐怖をクマの恐怖として説いてやまなかった。

この時のクマが有名になって，その翌年から夏になると「両陛下に拝謁したクマがとうとう仕留められた」などと新聞に出るからこたえられない。東京からわずか2時間でケニアみたいなところへいけるというので，たくさんの人が那須へ那須へ。あの土地の繁栄には，クマも一役買っている。

陛下の一行は人数が多いから安心だが，私の朝の散歩はたったひとり。日の出を見るのをあきらめたのはそのためである。ある朝，若い侍従と2人でいくことになった。2人だから大丈夫と話しながらあるいているうちに立ちすくんだ。アズマネザサの群落に大変な物音。姿は見えないが，音からいってクマにちがいない。息を殺した。音は止んだ。音がしないのもこわかった。手をたたき大声でわめきながら，どこまでもつづく細道を，走るようにしてかえってきた。「クマにあった」といったら「野犬だ」とみんなから馬鹿にされた。どっちだったかは今もってわからない。

この辺にはキツネもたくさんいる。走るのを見た人もあるし，なにかにやられた子ギツネの死骸は私も見た。

御用邸からそれほど遠くない林の中。夏の盛りだが，海抜六百何十メートルの木かげはそれほど暑くない。ナラやクヌギの下に，細い道がうねうねとつづいている。

左のほうの高いところから，エゾアカガエル（だろうと思う）が，横っとびにとんできた。すぐあとから大きなヤマカガシが，ズーッとすべるようにして追ってくる。カエルはいっぺんに大きくとんで一時は距離を引きはなすが，次にとぶためには，くずれた態勢を立てなおさなければならない。ヘビは絶えず進んでいる。だから距離はどんどんせばまる。あっいまやられるという時に陛下のお列。死を眼前のカエルは人間を恐れなかった。お列の間を横切って下のほうへとんだ。追うヘビには人を恐れるだけの「ゆとり」があった。きわまできて「人」に気づいてUターンして藪かげに消えた。

宿舎の私の部屋のすぐ前に，アオダイショウの大きなのが，よくとぐろを巻いている。こんなになるまでには，どれだけのカエルを呑み込んだことか。そうかと思うとそこからあんまり遠くないところに，これ以上は大きくなれないと思われるほどのヒキガエルが2疋も3疋もいる。これはまたこれで，どれだけのカやハエ，ガガンボやカナブンを食べたことか。カエルの糞をよくよく見ると，きらきら光っている。昆虫の羽のキチン質が，不消化のまま排泄されているのである。

アオダイショウとヒキガエル。10メートルとはへだたらないところで，両方ともこれ以上ないほど巨大になっている。加害者と被害者の関係は一体どうなっているのか。アオダイショウの怠慢か，ヒキガエルの命冥加か。

御用邸の少し上，海抜700余メートルのところに，ごく浅い水たまりがある。この辺は冬は零下十何度までさがる。もちろんこの水は凍りついたり，雪におおわれたりする。もう風が秋になった9月の末，まだ脚も出ないオタマジャクシが泳いでいる。この冬をどうするつもりか。親ガエルはそんなことにはおかまいなしに産むものなのか。

ついこの間焼けた葉山の御用邸の横を，下山川が流れている。もうすぐそこで海にはいるというところでこの川を渡ると，御用邸に付属の庭がある。

2，3年前のことだが，両陛下はここをご散歩になった。池の中になにか黒く長い物がある。さかならしい，ウナギだろうか，ということになった。棒で引き寄せた。逃げない。もう死んでいたけれども，死んでからあまり経ってはいなかった。50センチほどのウナギである。

はっきりしたことはわからないが，ニューギニアあたりの南太平洋でうまれて，万里の波濤を群れつつ漂って，また日本の川の河口にたどりつくというこの魚。たぶんそこの下山川をさかのぼって，そしてどのようにしてかこの池にはいって，これまでに育ったものだろう。

ニューギニアの海底から泳ぎ出し，数え切れないほどの危険にとりかこまれつつ，よくそれに堪えてこの池にはいり，これまでに育ちながら，どうしてまた死んでしまったものか。わからないことばかりである。

————→ *

え　清水　勝

殺しまくった150年



アメリカバイソンの悲劇　3

藤原英司

平原のインディアンがウマを手に入れたころ，大陸の東部には，白人が続々とヨーロッパから押しかけ始めていた。

イギリスの入植者は，まずバージニアやマサチューセッツに集団で住みつき，そのあとも白人の入植は休みなく続いた。そしてまもなく，ワシントンの西にそびえるアパラチア山脈の麓までひろがった。このアパラチア山脈こそ，西へ進む白人の勢力をまず最初にはばんだものだった。しかしかれらは北方の湖や川を伝い，また南部のアラバマやジョージアの平原を通りぬけ，あるいは直接山脈をのり越えて，西へ西へとひろがっていった。

そしてこの時期から，バイソンは急速に各地から駆逐されていった。

アメリカバイソンがたどった滅亡の歴史は，大きく3つに分けて考えることができる。その第1の時期は，1730年から1830年にいたる100年間である。1800年ごろまでに，ミシシッピー川の東部に残っていたバイソンの小さな群れが，まったく姿を消した。

第2の時期は，1830年から1874年である。1830年，大平原のバイソン群に対する組織的な大量殺戮が始まった。バイソンの皮や肉，舌などによって，ひと儲けしようとたくらんだ連中が，銃で武装し，ウマにまたがり，幌馬車隊を引きつれてバイソンを殺しまくった。

この時期の狩りで記録に残る有名なものは，1850年にレッド・リバーで行なわれたバッファロー狩りである。このときくりだした幌馬車は800台から1000台にのぼり，子どもまでふくめて，1000人以上の男女が狩りに参加した。腕のいいハンターは，皮むき係が皮をむき終わらぬうちに，次のバイソンを射殺して得意がり，一方，皮むき係は，1頭の皮を5分でむいてみせて腕まえの自慢をした。1日で250頭のバイソンを射殺するハンターは珍しくなかった。

当時の虐殺の模様を知るには，そのころの毛皮会社が取り扱った，生皮や舌の数字がよい参考になる。たとえば，1848年のアメリカン毛皮会社の記録をみると，11万枚のバイソンの皮と，2万5000枚の舌が記録されている。

1870年ごろまでに，バイソン狩りは平原地帯の花形産業となり，1871年には，1つの毛皮会社で25万枚の毛皮が取引きされた。その後，この傾向はますます激しさを加え，1873年からあくる年にかけて，テキサスのフォート・ワースでくりひろげられた毛皮の競売では，1日か2日のうちに，20万枚のバイソンの毛皮が動いたといわれる。

このバイソンのすさまじい殺戮に拍車をかけたのが，大陸横断鉄道の建設である。これについては，あとでもう少しくわしくみることにするが，鉄道の建設によって，バイソンの滅亡への歴史は，少なくとも20年は早められたとみられている。そして1874年には，大陸南部の平原からバイソンはまったく姿を消した。

第3の衰退期は，1876年から1883年で，この時期にハンターは，北部の大群を狩りたてた。1882年に北部地域にはいっていたハンターと皮むき職人の数は，5000人と推定されている。そして，この年からあくる年にかけて，北部のバイソン群は，ほぼ完全に撲滅された。だが白人たちは，バイソンを絶滅に追いこんだとは思っていなかった。バイソンはみんなカナダのどこかへいってしまったと，思っていただけだった。

こうして1900年には，アメリカ全大陸に残存するバイソンの総数は，300頭以下にまで激減したのである。つまり，1730年から150年ほどの間に，空の星の数ほどいたといわれるバイソンは，絶滅寸前の状態に追いこまれることになった。

バイソンがもっとも急激に数を減じていったのは，第2衰退期以降，すなわち1830年から，わずか50年ほどの間である。自然の利用が企業化されると，自然破壊が加速度現象を呈する見本が，この

＊ ――――→

きょうその池のところへ行ってみたら，小さなオタマジャクシがいっぱい泳いでいた。オタマジャクシばかりでなく，透明な稚魚もたくさんいる。ちょっと泳いではすぐ泥にもぐるところから見て，ハゼの類だろうと思う。

同じ池のつづきで，水は通い合っているのかもしれないが，生物は行き来できない隣の区割をじっと見ていたら，4センチほどのものが，底の泥をにごらして逃げた。藻が浮いていてはっきりは見えないが，形からいうとちょっとアメフラシのようである。けれども海から程遠いこんなところにアメフラシがいるはずがない。なお見つめていると，少しずつ澄んできて，いくらか見えるようになってきた。脚がはえているらしい。ヤゴにちがいない。

ヤゴは相当量の水中生物を食べる。うちの庭の池に，昨年クロメダカの稚魚が無数にかえったが，うっかりしているうちに，大部分が7，8疋のヤゴにやられてしまった。

ヤゴのいる区割にはオタマジャクシも，ハゼの類の稚魚もいない。いないのはヤゴが食べてしまったからか。隣の区割には，ハゼもオタマジャクシもいっぱいいるのに，ここのヤゴたちはそこへは行けない。そこにはヤゴはひとつもいない。トンボの親はここへは卵はうみつけなかったものか。

かえりがけにまた焼けあとを通った。建て物はなめたように焼け果てて，礎石だけが空しくのこっていた。すぐそこの芝生には，ツグミがヒヨドリが，キジバトが，降りていた。

風が南に変わって海がさわがしい。ウミネコが横っとびに飛んでいった。トビの声，カラスも鳴いている。

いつだったか朝早く，この前の浜をあるいたら，砂浜にうち上げられたなにかの上にカラスがとまって，夢中でつっついていた。だんだん近づいていったら，カラスはしぶしぶ飛び去った。たった今までカラスがついばんでいたものは，きのうかおとついか，あがったネコの死骸だった。

洋の東西を問わず，カラスは腐肉を食べることに，昔から相場がきまっているのだが，それにしても，毛もところまだらにはげるほど腐り果てたこのネコ，なにもこんなものまで食べなくてもというようなものだった。今鳴いているのもあんなものを食べる鳥の声である。

芝生の隅にアカテガニの死骸。このカニは成長すると海近くの陸上に住むが，満月か新月の夜，潮が高く満ちる時に，いっせいに浜に集まって，6万箇ほどの卵をいっぺんに放出する。産卵に満潮が都合がいいからのことで，別に詩の心からでも，夢見心地からでもない。

でもどうして満潮ということがわかるのか。■　（侍従長）

ときすでにはっきりとあらわれていた。だが，人びとがこの単純な方程式に気づいたのは，ずっとあとになってからである。

鉄のウマ

白人の西部開拓が拍車を加えると，平原ではいたるところで銃声が鳴り響き，バイソンが次々と倒されだした。それをみて，まず驚きの目を見張ったのが，インディアンである。弓矢でバイソンを狩っていたインディアンにとって，白人の狩猟は，まさに天地がひっくりかえるようなできごとであったといってよい。白人の狩りを見たインディアンは，まずとても信じられぬというように目をこすり，次いで驚きたまげ，最後に激しい怒りにかりたてられた。インディアンにしてみれば，よそ者が自分たちの土地にかってにはいってきて，だいじな生活の糧を荒らしたのだから，腹がたつのも当然のことだった。

1865年に大陸横断鉄道が着工され，線路が西へのび始めると，バイソンの減少は目に見えて顕著になった。煙を吐いて平原をばく進してくる〝鉄のウマ〟は，日ごとに多数の白人を送りこみ，バイソンの殺戮は日を追って激しさを加えた。激怒したインディアンは，人けのない土地に入植した白人の住居を襲い，商人の幌馬車を襲撃し，鉄道工夫の一隊に戦いをいどんだ。

1860年代の半ばから後半にかけて，インディアンが白人を襲った動機は，ほとんどが，バイソンの争奪に端を発していたとみてよい。

そして1867年8月，ついにシャイアン族の一隊が列車襲撃を敢行した。このとき，かれらはユニオン・パシフィック鉄道の貨物列車を襲撃して貨車を奪取し，数人の乗務員を殺害した。

その後，事件はあいつぎ，ついにたまりかねた政府は，インディアンと平和協定を結ぶため，使節団を派遣した。会談は1867年10月にカンザス州南部のメディスン・ロッジ・クリークで開かれた。この会談で協定は成立したが，白人もインディアンもそれを守ろうとはせず，その後も対立は激化するばかりだった。

この協定の趣旨は，白人があまりバイソンを殺すとインディアンの生活が困るから，ほどほどにしておこうというものだった。しかし，両者の対立が激しくなると，こうした協定の趣旨は，白人たちによって逆用されるようになった。

つまりインディアンを殲滅するために，バイソンを殺すことが公然と奨励されるようになったのである。シェリダン将軍は「バッファローを1頭殺すごとに，インディアン1人が死にたえる」とまでいってバイソン狩りを奨励したといわれている。

一国の権力者が〝奨励する〟といえば，一般民衆はこぞってそのお墨付きを掲げ，前後の見境なく暴走する。これは古今東西を問わず，人間という群居動物の悲しい性である。しかも，その奨励が自国民の繁栄のためという大義名分を獲得すると，その暴走はとどまるところを知らなくなる。

こうして年ごとに，バイソンは大幅に減りつづけたが，そのようにバイソンが目に見えて姿をひそめていくにつれて，インディアンたちのあいだには奇妙なうわさが流れ始めた。バイソンは白人をきらって，北の国の大きな湖のなかへどんどん逃げこんでおり，いつかまた北から帰ってくるというのである。これは，バイソンを絶滅寸前まで追いこんでいった白人たちが，バイソンは北の国のカナダのどこかへ逃げたと考えたのと似て，まったく根拠のない楽観であった。■

警察に出頭したオランウータン

徳山署に出頭して指紋をとられるジョニー君（雄3歳）



全国に40近くある公立動物園のなかで，徳山市立動物園は〝ＰＲじょうず〟の部にはいる。同園にはいま3頭のオランウータンがいるが，その指紋はぜんぶ徳山警察署でとってもらった。

「シロウトがやっても，なかなかうまくとれないし，警察でやると地元のニュースになって，マスコミも書いてくれる。ＰＲになるんですよ」

と，飼育係のＮさんはいう。

事実，この春に3頭めのジョニー君を徳山署へ連れていったときも，地元紙や全国紙の県版に写真入りで報じられた。

「署にはいる時は愛きょうたっぷりだったが，刑事課鑑識係の面々に囲まれ，いざ指紋採取の段になると，恐れをなしてかイヤイヤすることしきり。ついには緊張のあまり，オシッコをもらしベソをかいた」（「中国新聞」4月17日付）

密輸中継基地の絶滅へ

オランウータンの指紋採取が始まったのは，3，4年前からである。〝犯罪の恐れ〟があるからではなく，かれらの種族保護が目的だった。

周知のように，野生のオランウータンは，ボルネオ島とスマトラ島にしかすんでいない。ところが，現地での乱獲が激しく，2年前の調査でもわずか5000頭。オランウータンが絶滅する心配がでてきたのである。

オランウータンの母親は，妊娠（にんしん）してから233日で1頭の子を生み，3年間はそばに置いて育てる。その間に次の子が生まれることはない。ネズミのようにめったやたらとふえるものではないのである。

おとなのオランウータンは力も強く，生けどりがむずかしい。そこで，現地人は母親を撃ち殺して1,2歳の子どもを捕える。捕えたオランウータンは，現地では100ドル（3万6000円）が相場で，以前はトランジスタラジオ1台と交換されることもあった。

買い手は東南アジア航路の日本人船員が多かった。日本へ連れてきて動物商に売ると，1頭10万円になるというボロい話だったのである。さらに，動物商の手から動物園などに売られるときは，40〜50万円の値がつくのだから，ボルネオやスマトラでの乱獲に拍車をかける形になった。

日本を中継基地として，アメリカやヨーロッパの動物園へ買われていったオランウータンも多かった。

「そのころ，国際動物園長連盟から，オランウータンの〝密輸基地〟である日本へ，なんとか対策を立てろと，厳重な抗議が寄せられたんです」

当時，上野動物園の園長だった古賀忠道氏は回想する。

そこで，通産省にも働きかけて，42年から現地政府の正式な捕獲証明のないオランウータンとフィリピン産サルクイワシは，〝密輸品〟として税関で没収することになった。

一方，動物園側でも〝密輸品〟は買わないという申し合わせをし，同時に全国の動物園にいるオランウータンの登録作業を始めたのだ。

「個体識別のためにいれずみで番号をつける方法もある。しかし，いれずみをした動物をお客に見せるのもへんだから，指紋登録にしたんです。すでに49頭のオランウータンをぜんぶ登録しました。ただ，荒っぽくてまだ指紋をとれないやつが，3分の1あるんですよ」

と，登録の実務をしている東京・多摩動物公園の斎藤勝獣医師は苦笑する。

そんなわけで，動物園ずまいのオランウータンたちは，ジョニー君のように，故郷の同胞のためとはいいながら，指先にべっとりインクをつけられて，オシッコをちびるはめになったのである。将来はこの登録の記載をもとに，年齢や性別を考慮し，お嫁さんの世話もして，子どもをふやすのが動物園の念願だという。

「いま，ボルネオやスマトラでラワン材をとるために，日本の商社が原生林の伐採を大がかりにやっているんです。これはオランウータンをはじめ，野生の動植物を根こそぎ絶やすことになりかねません。人類滅亡の序曲として，ゴリラやオランウータンが，地上から姿を消すなんて寂しいかぎりです。自然破壊の〝輸出〟は，もう自粛すべきだと思います」

多摩動物公園の浅倉繁春飼育課長はエコノミック・アニマルに警告を発するのである。■　（本誌編集部・上田記者）



指紋登録No 1　徳山動物園のゴンタ（雄7歳）の指紋（右手）
左より親指，人さし指，中指，薬指，小指



雄（左端）に率いられるインパラの雌の群れ
（アフリカ・マニヤラ湖国立公園）撮影・田中光常

もうひとつの世界

15

グループ・5プラスⅠ

変化する群れの様式

一般にシカは群れで生活し、クマは単独で生活するといわれる。生活様式の類型的区分のしかたの1つである。

実際，シカは雌と子を中心にした群れで行動するのが見られるし、ヒグマがひとりで歩きまわっている光景が写真に記録されてもいる。

しかし、群れか単独かは、そう簡単には区別できない。たとえば、クマは親子連れやつがいで暮らしているときもあり、シカの雄は交尾期に多くの雌を従えるものの、追われたいわゆるアブレ雄もいるし，交尾期以外は単独で徘徊する雄も多い。

ボルネオとスマトラだけに分布するオランウータンは、その群れの構造が，まだよくわかっていないといわれている。単独の成獣の雄，つがい，それに子の加わったもの，雌と子，2,3頭の若い個体といった実例が見られている。ある場合には，前の夜いっしょだったつがいと子とが，次の日は雄と，雌に子との2つに分かれたりする。だが，オランウータンのすばらしい腕わたりによる樹上移動の能力から判断すると，雄がほんとうに雌から分かれたのか，疑わしいともいえる。人間の目で見ると離れてはいても，オランウータンにとっては隣室にいるのと同じと考えられもするからである。となると，単独の雄もほんとうに単独なのか，なんともいえなくなる。

群れは，個体どうしが緊密な関係をもつ集団で，同じような日常生活を集団として行なっている。単独生活の場合には，日常生活は個体が単位である。そしてなわ張りをつくって，同種の他の個体を排除しあう。とはいっても，他の個体とまったく無関係なのではない。雌雄のつがい関係はつくられるし，親子の関係も一定期間は続くのである。つまり単独生活とはいっても，個々バラバラ，まったく関係なしに生活しているのではなく，なわ張り制もそのような個体間のあり方の1つのあらわれ方だということになる。

いわゆる単独生活の動物でも，母と子どもたちの同居期間があるが，その子（雌）の発育が早くて同一群内で繁殖していく場合には，集団が大きくなって，いわば群れがつくられる。

子は母の行動をまねて，その種の生活様式を身につける。母の行動に従うことが，生活を成り立たせるうえで有利な場合は，群れは群れとして存続されよう。少なくとも，群れは防衛上では有利であり，遊牧しながら，食物を捜すうえでも，労は少なくてすむ。

このような雌の群れに効率よく繁殖させるには，それに雄を配すればよい。これが一夫多妻型になる。とはいえ，遺伝形質を新しくするには，雄どうしで淘汰しあうほうがよい。そのため雄は交尾期になると，雄を相手に戦い，いわゆるなわ張りを形成して雌群をそのなかに確保する方法をとる。その細部は種によって異なるが，雄どうしの戦いで，勝ち残った強健な雄が多く交配する。

なわ張りは交尾期のみにつくられ，他の時期には雄はルーズな結合や単独でいるという種が多い。雌の群れを支配するとはいえ，雄は多くの場合，群れの外縁部に発情した雌を連れだしたりして短期間のつがいをつくるので，単独生活の雌雄がつがいをつくるのとは期間が長い短いだけで基本的には変わりはない。

単独生活のもののつがいの様相も，1シーズンだけだったり，そのシーズンのなかでも雌が妊娠（にんしん）して拒否すれば雄は他のつがいを求めるなどいろいろである。このつがいが長期に及ぶものが，家族群ということになる。これはオオカミのように子が多くて養育に手がかかる場合や，雄の防衛力が必要な場合であろう。

あるいはまたヒョウとライオンの例においても，一方は単独生活で，一方が群れ生活ではあるが，次のような共通の型をもっている。すなわち，ライオンの雄は，複数の雌とその子とをなわ張り内にもっている。ヒョウは雌雄単独であるとはいえ，雄のなわ張りは広くて，繁殖期になると複数雌のなわ張りをふくむなわ張りを形成する。

この場合には，群れの成員の個体間の空間が大きいという見方もできる。そしてその必要性は，獲物をふくむ土地の確保という，生活上からのものであろう。ライオンなどの場合には，オオカミ的な家族群の形を常時とりながら，複数の雌をもつものといえないこともない。

さて，この大問題は簡単には論じきれないので，このへんで話を閉じよう。

完全な単独生活や，完全に閉鎖的な群れというものはない。同一種でも交尾期や繁殖期などでさまざまに個体の結びつき方が変化する。また，食物をめぐる土地の確保などの条件によっても変わっていく。一定空間を個体の周囲に確保する単独生活と，リーダー制に基づく群れ生活という異なった現象形態は一般によく書かれているように定式的なものではなく，移行的なものなのである。

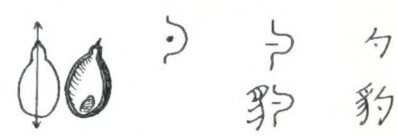
要するに，それぞれの種が，生態的条件のなかでどのように種を維持し，個体を維持するかという問題に対する構成のしかたなのであって，実体として存在するのは，種の具体的な存在様式なのである。さて，孤独を愛し，人恋しくもなるヒトという種は，いったいどうなのであろうか？■　（O）



えさや水を求めて移動するアフリカゾウの一族
（アフリカ・マニヤラ湖国立公園）撮影・田中光常

漢字のふるさと　14

藤堂明保



豹（ひょう）　昔の中国語では pău，それをまねて，呉音ではヘウ，漢音ではハウと読む。日本では呉音読みが普及して，ヘウ→ヒョウと呼ぶようになった。

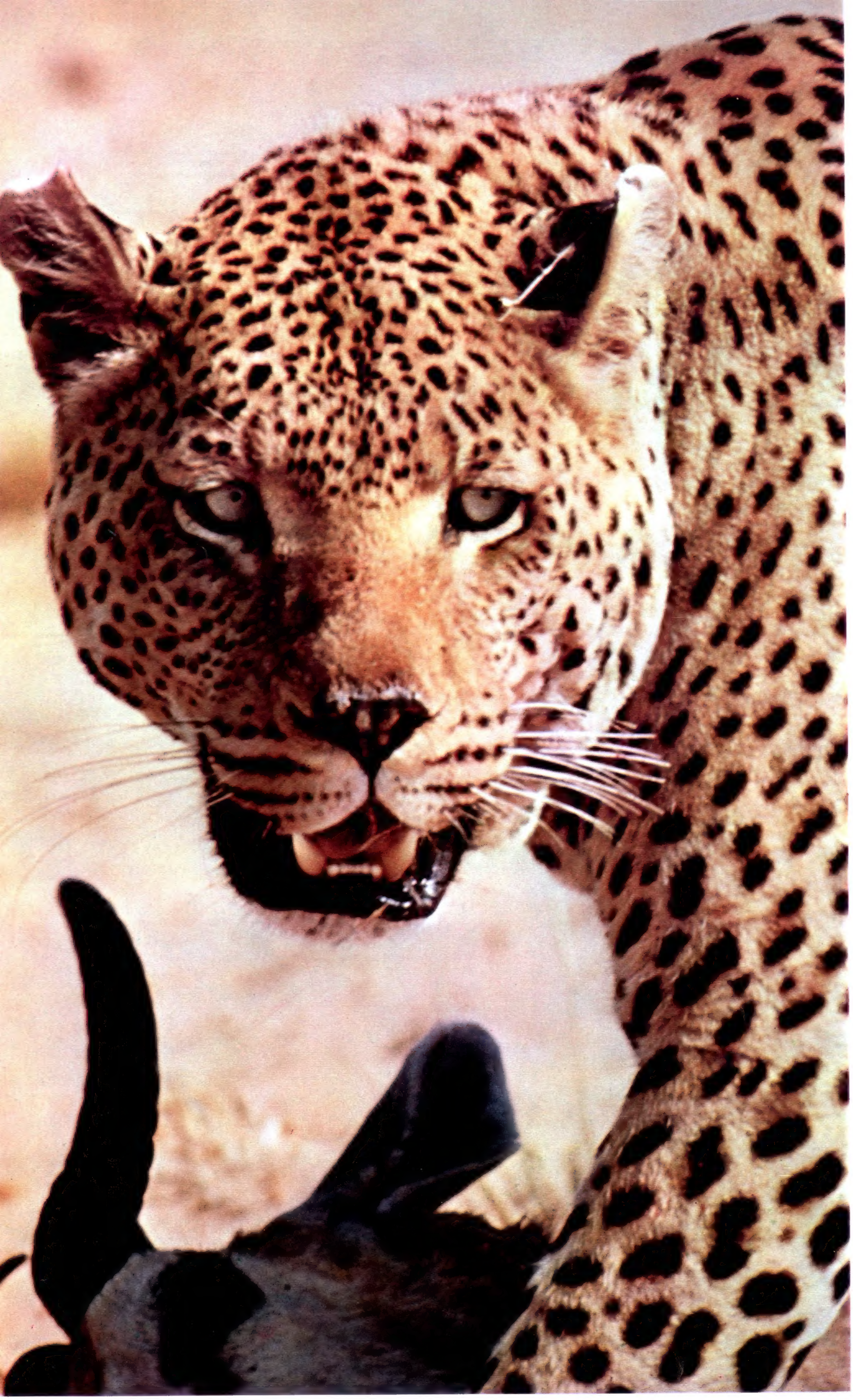
中国では，大きな冬瓜を乾かして，まっ二つに割り，それで液体をくむ。⊃型のウリの中に・印をそえて，勺という字ができた。そこで，液体をくむひしゃくを「杓」といい，シャクとヘウ（ヒョウ）の2つの発音で読む。シャクとは，酌（くむ）と同系のことばを表わすし，ヒョウの方は瓢（ひさご）と同じことばを表わすのである。

豹という字は「豸」（背の高い獣）＋音符「勺」からなる。勺（瓢）は，軽くてプカプカと水に浮かぶ。つまり漂流の漂と同系である。また，軽々と舞う風を飄という。つまり，ヒョウとは，「身軽な」という意味を含むことばなのである。ヒョウ（豹）という名は，この動物の身のこなしが，いとも軽快で飄然として飛び，飄々として消えさることから来ていることは明らかであろう。■



ヒョウ，ネコ科。
白い長い尾（左方，草のなか）をゆっくり振って
えじきとなる動物の注意をそらし
すきを見てとびかかり殺す，ヒョウ式殺獣法。
全身を走る緊張感，鋭い目，ヒョウの美しい一瞬。
PH. ARONS

19－1



ヒョウ *Panthera pardus*

古代ギリシャのアリストテレスや，紀元1世紀のローマの学者，大プリニウスのころから，ヒョウをどう分類するべきかについて，ナチュラリストたちのあいだで盛んに議論が戦わされてきた。

古代の人たちは，ヒョウがライオンから分かれたものと考え信じていた。それは，ラテン語の，ヒョウをあらわすレオパルデュスLeopardusということばが，ライオンを意味するレオLeoと，ヒョウを意味するパルデュスPardusという2つのことばから成っていることでもわかるであろう。

ヒョウは，ネコ科ヒョウ属に属するが，あらゆる食肉類の猛獣のうちで，もっとも広く，きわめて多種多様な風土の地域に分布し，すぐれた適応性をもっている。すなわち，サハラ砂漠をのぞくアフリカの大部分，それにコーカサスからアムール川流域まで，シベリア南部からマレー半島までのほとんどアジア全域にすんでいる。たくさんの亜種があるが，種としては1種と考えられる。

ヒョウは体長が120センチから160センチある。尾は細く長く，1メートルほどもあり，体長の4分の3に達するものもある〔注1〕。体重は60キロから80キロの間である。

頭は丸く，吻（ふん）は短い。首は短いが筋肉がたくましく，胸の肉は盛りあがっている。横腹は平たく強健なからだつきである。四肢（しし）は短くてがっしりしており，出したり引っこめたり自由にできるつめのついた大きな丸い足がついている。上のきばは，非常に発達している。体毛は亜種によって濃淡が多少異なるが，黄色が基調になっている。

からだには，輪状紋（りんじょうもん）と呼ばれる特徴のある小さな黒ずんだ斑紋があって，その大きさは小さなマメ粒くらいのものからクルミくらいのものまで，いろいろである。その斑紋は，背と横腹では完全にまるかったり，一部が欠けた輪のような形をしている。尾の上側は不規則な並びの斑紋におおわれているが，下側は斑紋もなく白くなっている。顔にも斑紋があって，縞模様のように並んでいる。耳介（じかい）は外側が黒っぽいねずみ色で，先のほうに明るい色の斑紋がついている。

体毛の全体の色合いからは雌雄の区別も，幼獣，成獣の区別もつかない。しかし亜種のあいだでは，色調はかなり違っていることもあり，東アフリカのソマリランドにいるヒョウの地色は白っぽい。また，ネコ科の動物に

ヒョウ。ネコ科。
獲物を倒して食事にありつこうとしている。
ごちそうはトムソンカセルの生肉か。
張ったあごが肉食獣の強力な咀嚼力を示している。
PH. LIFE TIME



よくみられる黒化現象〔色素が黒く沈着することで，いわば白子の反対である〕によって，地色が完全に黒くなっていることもある。

黒ヒョウは長い間別種とみなされてきた。しかし実際には，斑紋のあるヒョウの1腹の子のなかに，毛のまっ黒な子が1，2匹まざっていることがあるので，同一種とみなすことができる。

黒ヒョウは，むかしは，スンダヒョウと呼ばれていたくらい，一般に東南アジアの密林に多く生息しており，短気な性格であるともいわれている。〔注2〕

ヒョウには地方的に多くの亜種がある。しかし，斑紋の特徴で分けると，東アジアには，パンサーと呼ばれる斑紋の大きいヒョウが，また，アフリカにはレオパードと呼ばれる，斑紋が小さくて複雑なヒョウが，多く生息している。

ヒョウの亜種による差は，体長，体色，からだのたくましさなどで見分けるのだが，性質や習性はほとんど同じであるといえるし，すべて斑紋のついた大きなネコの感じである。

ヒョウの分布が地理的に非常に広いということは，ヒョウが他の動物にくらべて，生態的に特殊な条件を必要としないからである。ヒョウは，ステップやサバンナ，アフリカやアジアの湿潤な森林にもよく見られる。農耕の行なわれている地方では，畑や植林地や樹齢の若い造林地にすみつく。好んで山地にすみつくが，それは草の茂った斜面がうまい隠れ家を提供してくれるし，変化に富んだ豊富な獲物を与えてくれるからである。エチオピアでは，2000メートルから3000メートルの高度の地にすんでいる。よく，人のすみかのそばを選んですみ，人間が近くにいるということを恐れているようすはない。



イラスト　田中豊美

斑紋のちがい





ヒョウ，ユキヒョウ，ウンピョウの分布図。
ヒョウの分布域の非常に広いことがわかる。
黒ヒョウはヒョウの黒変種で，東南アジアに多い。
パンサーとレオパードは，ともにヒョウの変異で
パンサーは東アジアに多く
レオパードは，アフリカ，インドに多い。（下左）

ユキヒョウ。ネコ科。
ヒョウとは異なった種である。
中央アジアの山岳地帯に生息していて
ヒョウより長い，白っぽく密な毛をもつ。（上）
PH. VISAGE JACANA

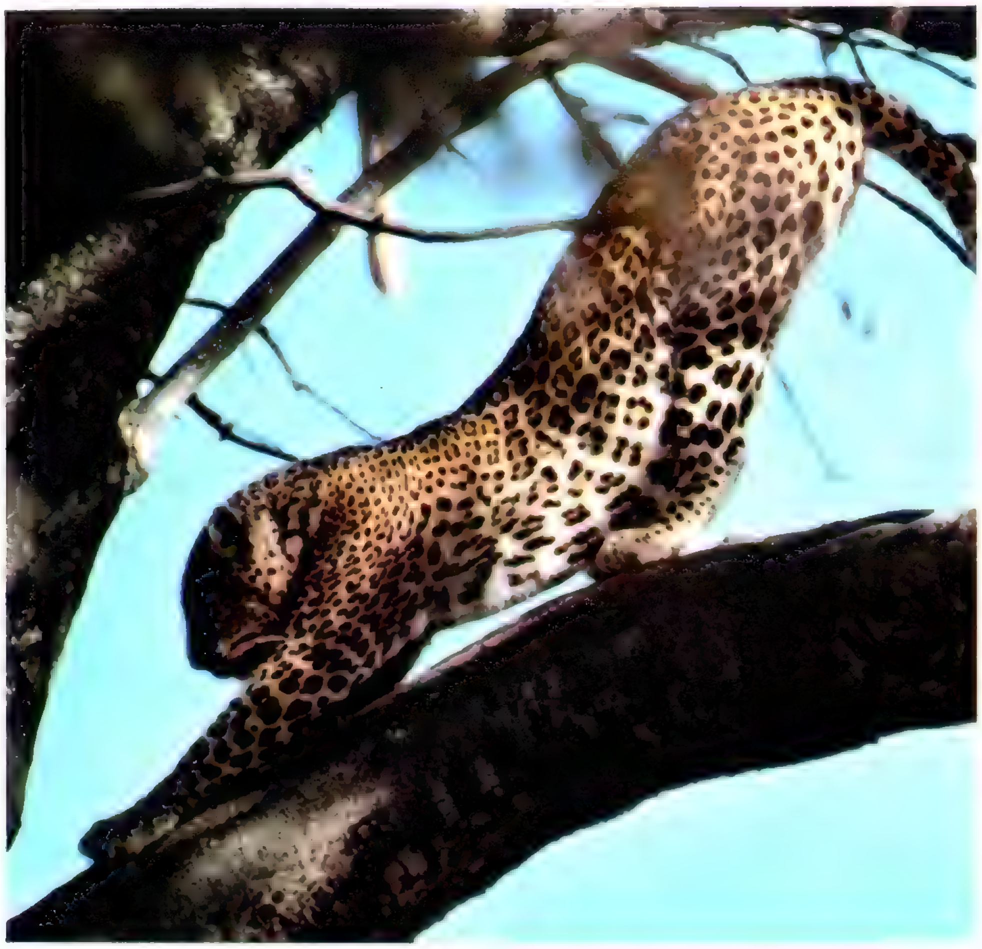
ヒョウ。
色素が多いため黒くなったヒョウの個体である。
一般に黒ヒョウと呼ばれている。
黒ヒョウは個体によって色の濃淡がある。（下右）
PH. OKAPIA



19－4

ヒョウ。ネコ科。
きばをむきだし、三白眼(さんぱくがん)の鋭い目つきをした
黒ヒョウの威嚇の声が聞こえるようだ。
毛色が黒くて精悍にみえるため
とくに気が荒いともいわれている。

PH. ZOO DI MILANO



優雅な殺し屋

ヒョウの体色は、獲物を待ち伏せして、やぶのなかや木の葉の茂みに隠れている動物にしては、むしろけばけばしすぎる色調と紋様のように思われるが、大自然のなかに身を置けば、ほとんどまわりの色調に紛れてしまうのである。また、ヒョウが森林にすんでいると、だんだんにその体毛の色合いが、くすんできて、目だたなくなるともいわれている。

ヒョウは並みはずれた生命力と力と抵抗力をもっていて、足の速い用心深い獲物でも、うまく捕える。木登りも泳ぎも跳躍もじょうずで、追いかけられるとすぐ木の上に逃げるし、大きな川も泳ぎ渡る。それらの動作のひとつひとつが、いかにもしなやかで、羽毛のように軽々としていてしかも正確である。ヒョウが走りながら、木のあいだややぶのあいだにうまくすべりこむところは、見ていて実に美しい光景である。肉食獣のなかでは、ジャコウネコ科のジェネットがこれと同じような光景をみせてくれる。

ヒョウは小さいものから大きいものまで、あらゆる動物をとって食べる。獲物は頸椎（けいつい）を折って殺し、それからのどをかみ切って血をなめる。死体は木の上に引きあげてそこでゆっくり食べる。こうしておけば木に登れないハイエナの襲撃から死骸を守れるからだ。また、空からの掠奪者ハゲワシも、不思議なことにヒョウの獲物は襲ってこようとしない。

レイヨウやジャッカルや中ぐらいの大きさの家畜がヒョウのおもなえさになるが、鳥も食べる。サルを木の高い枝まで追いあげて捕えるが、とくにヒヒをよく襲う。ヒヒは群れをなせば、ヒョウのいない地域ではなにも恐ろしいもののない動物なのである。ヒツジ小屋を襲って、大量の虐殺をすることもある。一晩で10数頭ものヒツジを殺してしまうので、ヒツジ飼いはほかのどんな野獣よりもこのヒョウをこわがる。また、大胆にも、ゾウを襲うという話もある。そのときは、リーダーのゾウを最初にねらうという。

ヒョウは、興奮すると1頭だけの獲物では満足せず、手当たりしだいに殺してしまう。そして、食欲が満たされると、いらなくなった獲物をその場に置き去りにしていってしまうのである。

なかなか大胆で、大きな森の近くにある人家によく姿をみせたり、町や村のなかにまではいってくる。人の見ている前でも家畜を襲うほどなので、アフリカの多くの地域の原住

[illegible]
[illegible]でめざめ[illegible]昼寝からさめ、伸びをしている
しなやかな[illegible]といえども
[illegible]のないヒョウの曲線美には
[illegible]といったところであろう
PH. DRAGESCO–ATLAS PHOTO



[illegible]
[illegible]を立て、[illegible]をとりながら全力疾走中。
かれの瞳に映るのは逃げる獲物の姿であろうか
緊迫した場面だが、[illegible]の
ひとこまを見るような優雅ささえ感じられる
PH. LIFE–TIME



[illegible]



民たちは、ヒョウの夜間攻撃から家畜を守るために、特別にしつらえた木造の家畜小屋に家畜を閉じこめておく。

人食いヒョウ

ヒョウは手負いになったり、自分の子が危険なめにあわされたりすると、猛然と人にとびかかってくる。また、挑発されなくても人を襲うことがある。インドのいくつかの地方には今なお人食いヒョウがいるといわれている。〔注3〕

ある1頭の人食いヒョウは、夜、家の中にはいっては、眠っている人間を襲い、畑の番人をも襲って殺した。そして驚くなかれ、3年間にこのヒョウは、30キロにわたる地域で200人以上の人間を殺したのである。殺し屋もここまで徹底すると、人びとの関心を集め、やがて、次のような伝説が生まれ、語り伝えられている。

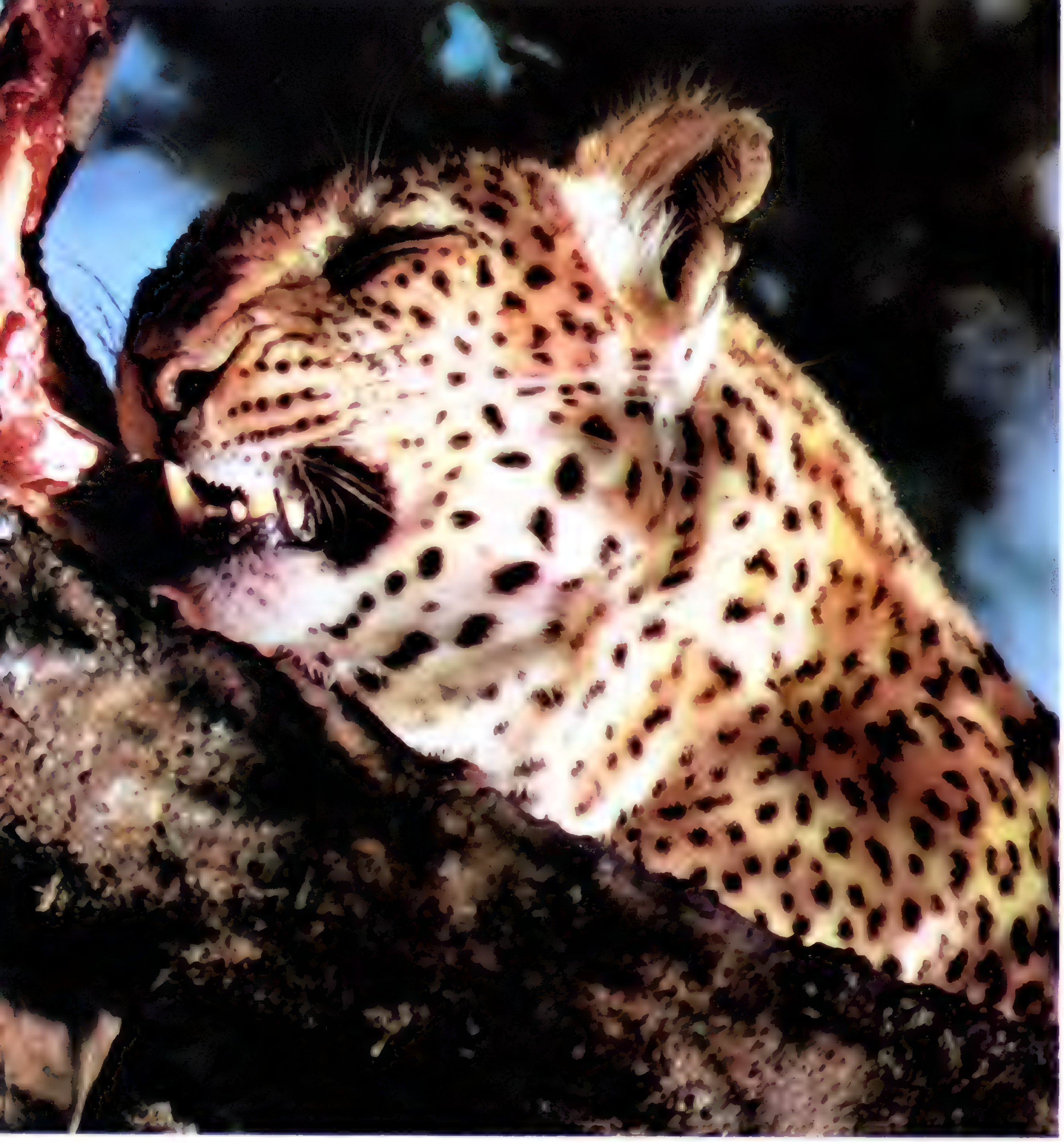
ある日、夫婦がインド最古の都市の1つであるベナレスへの巡礼を終えての帰り道で、突如1頭のヒョウと鼻を突きあわせた。2人は恐怖のため身がすくんでしまったが、夫がとっさに、飲むとすぐにヒョウの姿になれるという魔法の粉"豹変粉"を持ちあわせていたのを思いだし、妻にそれを教えて安心させたうえでひとつまみ飲みくだした。ヒョウから人間にもどるときは再び"豹変粉"を飲めばよいのだ。

妻は残りの粉をたいせつに持ち帰り、夫はヒョウになりきって、本物のヒョウをうまく追い払うことができた。ヒョウの姿をした夫は、意気揚々と妻の待つわが家に帰りついたのだが、悲劇はここから始まる。

妻は、精悍なヒョウが戦いの興奮もさめやらぬ鋭い目つきでノシノシと家に近づいてくるのを見て、恐怖のあまりたいせつな"豹変粉"を地にばらまいてしまったのである。人間にもどる望みを愛妻によって断たれてしまった夫は、絶望に狂って、妻を殺し、以後、あの恐ろしい人食いヒョウになって人間を食い殺しつづけた。

ヒョウの母性愛

ヒョウの交尾期は、2月と3月の間である。雄が何頭も雌の近くに寄り集まり、ネコのように声を長くひいて、だがもっと鋭く、もっと力強い声でほえたてて雄どうしで猛烈な争いをする。しかし、そのうがいも交尾期の間だけしか続かない。妊娠（にんしん）期間は90日であり、1回に生まれる子どもの数は3匹から5匹で、生まれてから10日たつと、目が開く。おとなしくかわいらしいヒョウの子



は、その絹のような毛並みに、すでにかすかな斑紋をつけている。

かれらは子どもどうしでネコのように戯れては、母親を遊びの仲間に引き入れる。母親は、いろいろと子どもたちの世話をやき、どんな危険な状況になっても子どもを見捨ててしまうようなことはせず、勇ましく子どもたちを守るすべを知っている。獲物をとるために子どものそばを離れていくときには、岩穴や、茂ったやぶや、木のほらなどにある隠れ家に、子どもたちを隠しておく。子どもがたくましいイエネコくらいの大きさになると、母親は子どもを連れて、いっしょに獲物を捜しにいく。授乳の期間、母親は非常にたけだけしくなり、子どもに近づく動物は、ちゅうちょなく襲いかかって殺してしまい、あたりに恐怖をまき散らすのである。

ヒョウ狩り

ヒョウを狩るのは、トラ狩りよりもむずかしいと考えられている。トラよりも数の多いヒョウは、いつもきまったなわ張りのなかで暮らしているとはかぎらないといわれるし、そのうえヒョウは、トラよりも長いこと水を飲まなくてもいられるので、長く隠れていられる。また他のどんな動物よりも身を隠すのがうまい。ヒョウはどこでも、さかんな狩猟の対象となる。インドでは、ネズミをとるわなと考え方においては同じわなでヒョウをとる。つまり、イヌやヤギをおとりにして、ヒョウをおびき寄せるのである。

アジアでもアフリカでも、ヒョウ狩りには



ヒョウ（ネコ科）
獲物の肉も樹上に引きあげたし、これでひと安心。裂肉歯で生肉を切り取って、ゆっくり賞味しよう。満足げなヒョウのこの顔。（上）
PH. DRAGESCO ATLAS PHOTO

ヒョウ
よく木に登り、獲物を見つけたり、食べたり自分の領分を見張ったりしている。このヒョウは足を投げだし、休息している。（下）
PH. FIEVET JACANA

ジャガー（ネコ科）
ヒョウに似ているが、ヒョウよりからだが大きい。南・北アメリカ大陸に生息し、ユーラシア大陸にすんでいるヒョウと、新旧大陸をすみ分けている。この太い前肢の一撃で獲物の頭骨を折る。（右）
PH. KLAGES ATLAS PHOTO









イヌがとても役にたつ。猛然とほえるイヌの群れに追われると，ヒョウは木の上にのがれる。そこを銃なり毒矢なりで，撃ち落とすのである。

家畜の群れに被害を与えるために，そしてまたとりわけ人びとに与える恐怖のために，ヒョウはいつも狩人たちから狩りたてられてきたのだが，その毛皮の美しいことも，ヒョウ狩りに拍車をかけた。ヒョウの毛皮はその紋様が独特であることと装飾的な要素のために，むかしから原住民たちのあこがれの的となっていた。原住民たちは，とくに戦士たちの楯のカバーに張るのにヒョウの毛皮がうってつけだと考えていた。

ところが，気まぐれな毛皮の流行がこうした古くからの狩猟をまったくの殺戮に変えてしまった。毛皮商たちの要求で，ある地域では，人も家畜も殺したことのないヒョウまでが，組織的に絶滅に追いこまれていき，その結果，植物に影響を及ぼす重大な生物学上の不均衡が生じている。

たとえば，アフリカ北部のアトラス山脈では，もはやヒョウに食われる心配がなくなったサルの一種マゴットが，極端に繁殖してしまい，木の枝をもいだり，若芽をめちゃめちゃにしたりして，だいじな森林にばく大な損害を与えたことがある。また，東アフリカの農園でも，同じような理由から，ヒヒやオナガザルがふえて大きな被害をこうむったという報告がある。

ウンピョウ　*Panthera nebulosa*

本誌ではウンピョウをヒョウ属に分類しているが，別属に分類する見解もある。この場合は，ウンヒョウ属となり，学名は ***Neofelis nebulosa*** である。

ウンピョウはヒョウに似ているが，もっと小型で，体長は62～110センチほどである。尾の長さは60～92センチもあり，からだの割りには長い。耳は大きくまるい。中国南部，台湾などにすみ，南はジャワ，西はネパール，シッキムのあたりまでの地域に生息する。

ウンピョウの名からもわかるが，その毛並みにある斑紋は，ジャガーのそれよりも大きく，雲のような形になっている。地色は黄褐色が基調だが，地域によっていくらか変化がみられる。この毛皮はご多聞にもれず珍重され，そのため台湾では絶滅にひんしている。また，ボルネオではきばも装飾用として重んじられているとのことである。

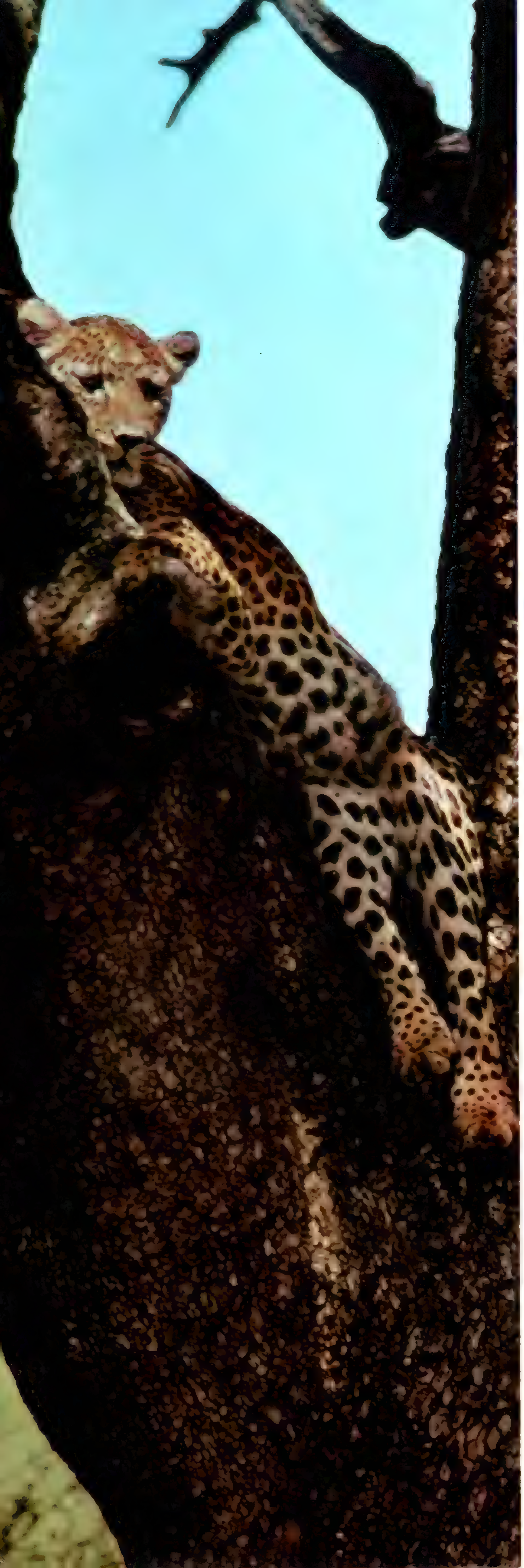
四肢（しし）が短く太く，足が幅広く，尾が長いといった特徴は，ウンピョウが樹上性



ヒョウ。ネコ科。
殺したトムソンガゼルを樹上に引きあげ
いま，食らいつこうとする瞬間である
枝に吸いつくような四肢，均衡を保つために
横に大きく振っている尾が印象的だ。**19** 10.11
PH. BLOMSTRAND JACANA

ユキヒョウ。ネコ科。
尾の長さは，ネコ科の動物中，1番を誇る
高山にすむ動物らしく，足うらは面積が広くて
毛が密生し，雪の上を歩くときは
ちょうど天然のかんじきのようになる。（左
PH. VISAGE JACANA

ヒョウの子。ネコ科。
1年ほど母親の保護のもとに育ち，獲物の狩りなど
生活の術を学んでから独立していく
おとなびてうなってみせている表情はまだ
ととのわぬ斑紋とともに，ユーモラスである。
PH. OKAPIA



の動物であることを語っている。つまり太く短い四肢と幅広い足は樹上での安定を保証するし、長い尾は枝を渡るとき、バランスをとるのに好つごうである。したがって、ウンヒョウの樹上での動きはサルを思わせるほど敏捷で、樹上にすむサルや鳥さえ捕食している。森林地、それも川べの深い低木林に多くすみつき、夜間に活動する。

ヒョウなどとくらべると、よりネコに似ていてやさしげにみえるが、木の上から下を通るシカなどにとびかかって殺すし、インドではウシを殺した例もあるほどで、大型の動物にも襲いかかって殺したりする。というのは、ウンヒョウの犬歯が、頭骨との相対的な長さでは群を抜いて大きく強いためである。ふつう一度に2頭の子を生む。

ユキヒョウ　*Panthera unica*

ユキヒョウもウンヒョウと同じく、ヒョウに近縁な別の種である。毛皮がすばらしいので、狩りたてられて、今では中国北部の山岳地帯からヒマラヤの標高2000メートルを越える地域に生息しているだけである。長く、ふさふさした、ヒツジの毛のような体毛は、そのすんでいる土地のきびしい風土に完全に適応していて、毛の色は明るく、ほとんど白といってもよいくらいで、斑紋の数はヒョウよりも少ない。

体長は120センチ、尾長90センチほどあり、おもに夜間に活動する。齧歯（げっし）類、鳥類、野生のヤギなどをえさとする。冬、食物が少なくなると山村の家畜を襲うこともまれにある。

動物園では飼いならしやすいが、おそらく大気中の酸素の含有量や気圧がユキヒョウの生息地とは異なるためであろう、あまり長くは生きないといわれる。

ジャガー　*Panthera onca*

ジャガーは、アメリカに分布しているネコ科の動物で、はじめて新大陸に船をつけたヨーロッパ人によって発見された。

アフリカやアジアのヒョウよりも、からだが大きくどっしりとしているジャガーは、トラに匹敵するほどの大きさと、からだのつくりとをもっている。成長したジャガーはおよそ80センチくらいの長さの尾と180センチほどの体長がある。体重は70キロから130キロの間で、そのずんぐりした重いからだは、ジャガーを敏捷というよりも、むしろたくましくみせている。

体毛は短く、濃く、柔らかくて光沢がある。のどや首のつけ根、胸や腹の部分は、ほかのところよりも毛が長い。体毛の色は一定してはいないが、大部分のジャガーは黄だいだい色が基調となっている。腹、口先、耳介、じ



ヒョウ　ネコ科。
水飲み場へ通じる道ばたの木に登って
草食動物をまちぶせることもよくある。
そんなとき、はでな斑紋も木もれ陽と見え
獲物の目からうまくからだを隠してくれる。（左）
PHOTO

ウンヒョウ　ネコ科。
樹上がかれらの天国で、非常に身軽に動く。
斑紋が大きく、尾の長いのが特徴である。
ふだんは、キャーキャーかん高い鳴き声をあげる。
撮影．朝日新聞名古屋本社写真部



かいこの内側は白い。

体毛は黒い斑紋で飾られているが、その斑紋も、あるものは小さく、細長くふぞろいで、あるものは大きくまるく、内部が赤みがかった黄色になり、1つあるいは数個の黒ずんだ点をまるく囲んでいる。背面では、これらの斑紋はたがいに寄り集まって、ほとんど1本の不規則な帯のような模様となっており、腰のところで2つに分かれている。胴体の両側では、多少規則的な、上から下に走る帯模様になっている。雌の体毛の色は一般に雄より薄い。

黒変体である黒ジャガーはきわめて珍しい。毛の色が非常に黒ずんでいるので、斑紋はほとんど見分けられない。

17世紀にはジャガーはまだたくさんいて、パラグアイだけでも、1年に2000頭も殺されていたようである。今日、アメリカ合衆国の南西部ではきわめて珍しくなっているが、メキシコや南アメリカのアルゼンチン北部とパラグアイにいたるまでの地域にはもっとも多く分布している。

水辺の森林にすむ

ジャガーは、一般に木のはえている川岸に生息している。また2メートル以上にも達する雑草やイグサのはえている沼沢地や、近くに泥沼があるような森の、あき地にすんでいる。ジャガーは、草木のない見通しのよいところを横切ることはないので、平原ではめったにその姿は見られない。

ジャガーは夜の明ける少し前と日暮れどきに獲物を捜しに出かける。ときには夜中にも出ていく。日がのぼってくると、丈の高い草のあいだや草のおい茂ったやぶのくぼみに寝そべって、1日じゅうそこで眠ったりまどろんだりして過ごす。

ジャガーは恐るべき狩猟家である。その動作は鈍くて無器用そうであるが、いざというときには、身軽に敏捷にふるまうことができ、トラやライオンにもおとらぬ並みはずれた力をそなえている。感覚は非常に発達していて、目は鋭く射抜くようで、聴覚は鋭敏である。



嗅覚（きゅうかく）はすべてのネコ科の動物と同じように、それほど鋭くはないが、しかし、遠くからでも獲物のにおいをかぎつける。

ジャガーの食物リスト

また、ジャガーが魚とりがうまいことは定説になっていて、多くの狩猟家が次のような話をしている。

「ジャガーは、川や池のほとりの水の浅いところを選んで、魚が下を通るのをしんぼう強く待っている。そして突然、ジャガーの足が電光のような速さで伸びたかと思うと、魚がつめの先にひっかかって、地面に投げだされている」

また、南アメリカのインディアンたちは、ジャガーが魚をとるのに、水の面につばを吐いて、それをえさ代わりにしていると思っているし、ある地方の住民たちは、その長い尾を水のなかにたらし、つり糸のように動かして魚をつりあげているともいっている。

ジャガーは、自分で捕えることのできる哺乳（ほにゅう）動物は、なんでも例外なく食べるし、沼地にいる鳥類を、イグサのあいだをわけて追いかけもする。また、あまり深くないところを泳いでいる魚をとるのもうまい。カイマン〔ワニの一種〕やヘビを前にしても、退却することはないようである。

18世紀から19世紀にかけて南アメリカを旅行したドイツのナチュラリスト、フンボルトは、こう報告している。

「ジャガーはカメにとって最大の敵である。ジャガーは、カメが卵を生みつける岸べで、カメを襲う。つかまえると、ひっくりかえして、あお向けにし、動けなくしてしまい、それからメスのようなつめで中身をくりぬく。ジャガーは、ときに全部食べてしまわないことがあるので、お余りは原住民がちょうだいする」

老練な狩猟家は、ジャガーを見つけようとするときにはまず、川に沿った草原や森林に目をつける。ジャガーは、よく、カワウソやミズブタ（カピバラ）をねらって、川岸に沿って進んでいくからである。ミズブタは川べりに群居している大きな齧歯（げっし）類で、その体重は50キロくらいである。ジャガーは、獲物にそっと近づいて、不意に襲いかかる。獲物の首を折って殺してから、茂みのなかに引きずっていく。むかしは、よくラプラタ川の大草原に放牧されていたウマやウシに殺戮を加えたものである。

虚をついて獲物に近づけなかったときには、ネズミを待ち伏せているネコのように、やぶのなかで、からだを丸くして静かに尾の先を





[illegible]
[illegible]は、[illegible]と同じ突然変異体である
[illegible]を襲っている[illegible]
[illegible]かもしれない。
PH. ATLANTIC PRESS

振りながら，しんぼう強く獲物を待ち伏せする。多くの場合，動物が水を飲みにくるところが待ち伏せの場となる。

ジャガーは，木の上で獲物を追うような危険はおかさない。しかし，自分が追われたときには，そのどっしりとした太った体格にもかかわらず，たやすく木によじ登る。だが，獲物をとるのは地上か水のなかなのである。

ジャガーは，小さい獲物をつかまえると骨も皮もみんな食べてしまうが，大きな獲物は一部分しか食べないでおく。食べ終わると，近くの森のなかへ引きあげて静かに眠る。その晩かその次の日の朝，再び死骸のそばにもどってきてまた少し食べる。そしてあとの残りは，コンドルなどのついばむのにまかせる。

ジャガーは人間に出会うとよけていく。珍しそうに人間を遠くから見るだけで満足している。傷を受けても反抗することはめったにない。まったく例外的な状況でなくては，ジャガーが人間を襲うことはない。

ジャガーの叫び声は，いわゆる野獣のほえ声とは似ても似つかない。ジャガーはヒョウやトラのように，静かな動物なので，せいぜい低くうなるだけで，高い調子の声を出すことはめったにない。多くの旅行者の話では，ホエザルが騒ぎたてるのではじめて，ジャガーのいるところがわかるということである。

えさがあって，じゃまされないかぎり，ジャガーは一定の場所にすみついている。獲物が少なくなったとき，はじめてすむ場所をかえる。すみかを移動するのは，いつも夜である。泳ぎは非常にうまく，必要とあればどんな幅の広い川も泳ぎ渡ってしまう。

一般に考えられているのとは反対に，ジャガーがいちばん危険なのは，水のなかである。追いかけられたり，手負いになったりするとボートに襲いかかってくることもある。ジャガーから受けた傷は，その深さのいかんにかかわらず，危険である。もしすぐに手当てをしないと，よく破傷風を起こす。

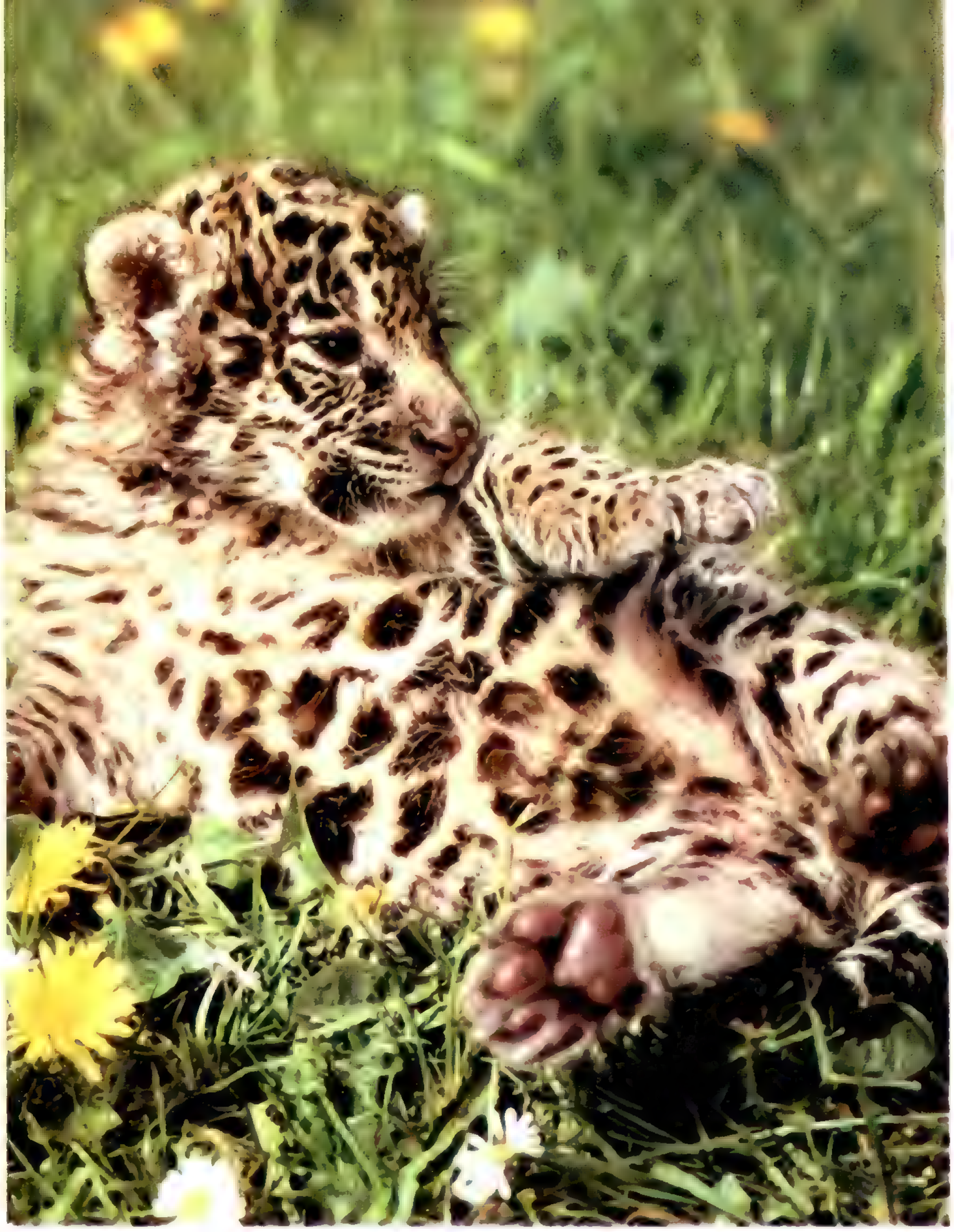
ジャガーの教育法

ジャガーは孤独な動物で，1年の大半をひとりきりでいる。ただ，1，2か月間の交尾期にだけ，雄と雌はいっしょになる。雌は2匹，ときには3匹の子を生む。森のなかのいちばん近寄りがたいやぶのなかとか，倒木の下などに穴を掘って，そこで子を生み，そのあとも，母親は子どものそばを離れない。もし危険を感じると，母親は子どもの首すじをくわえてほかの場所へ移す。母親は子どもを守ることを知っており，どんな敵でも必死になって追い払う。生まれてから6週間もたつと，ジャガーの子は母親のあとについて狩りにい



19　18

ジャガーの親子（ネコ科）
中・南アメリカ大陸に生息している。
ネコ科の動物のなかではいちばん大きく
体長180センチ，尾長80センチほどである。
PH. KLAGES - ATLAS PHOTO



た茂みのなかからジャガーを狩りだして猟犬と戦わせることもできるが、これはもっと危険である。人間が、腕にヒツジの皮を巻いて、もろ刃の特殊な短剣をふるってジャガーを突き刺し、あとは猟犬にとどめをさせる。

南アメリカの大草原のカウボーイであるガウチョは、ウマに乗ってジャガーを狩る。かれらは投げなわでジャガーを捕え、ジャガーが倒れるまで、地面の上を引きずっていく。待ち伏せやわなも、よく使われる。

ジャガーの毛皮は非常に珍重され、この猛獣が、急速に消滅していく原因の1つとなっている。南アメリカでは、この毛皮はとくにじゅうたんをつくるのに使われたり、装飾品として利用される。原住民たちはむかし、ジャガーのからだのいろいろな部分に薬としての効果があると思っていた。たとえば、その脂肪は寄生虫駆除の薬となり、つめを黒焼きにしたものは、歯の痛みをなおすというふうである。

ある原住民たちは今でもなお、ジャガーの脂肪をからだに塗ると、ジャガーと同じくらい強く勇敢になれると信じている。ジャガーが特別に狂暴になると、もうそれは動物などではなくて、魔力のある存在、あるいは幻想的な存在だと信じているのである。かれらはまたジャガーに、だいぶ前に死んだ、とりわけたちの悪い人間の化身をみることもある。

子どもたちは、はじめは茂みのなかに隠れているが、次には待ち伏せることを習う。子どもたちが猟犬くらいの大きさになると、母親は子どもたちをそれぞれの運命にまかせてしまう。7か月ころまでは、体毛の色は成長したジャガーの色とは違っているし、斑紋もはっきりしていない。

非常に小さいうちにつかまえると、ジャガーはたいしてむずかしいこともなく家の中で飼える。子イヌや子ネコとも仲良くして、いっしょに戯れるが、その動作は活発で優美である。飼い主をよく見分けるし、飼い主に友だちになってもらいたがり、そばへいくと非常にうれしがる。

ジャガーは、飼育下にあっても子どもを生む。ヒョウとも交尾をする。この結合からは、からだつきのたくましい、わずかに生殖能力のある雑種が生まれる。

ジャガーを狩る

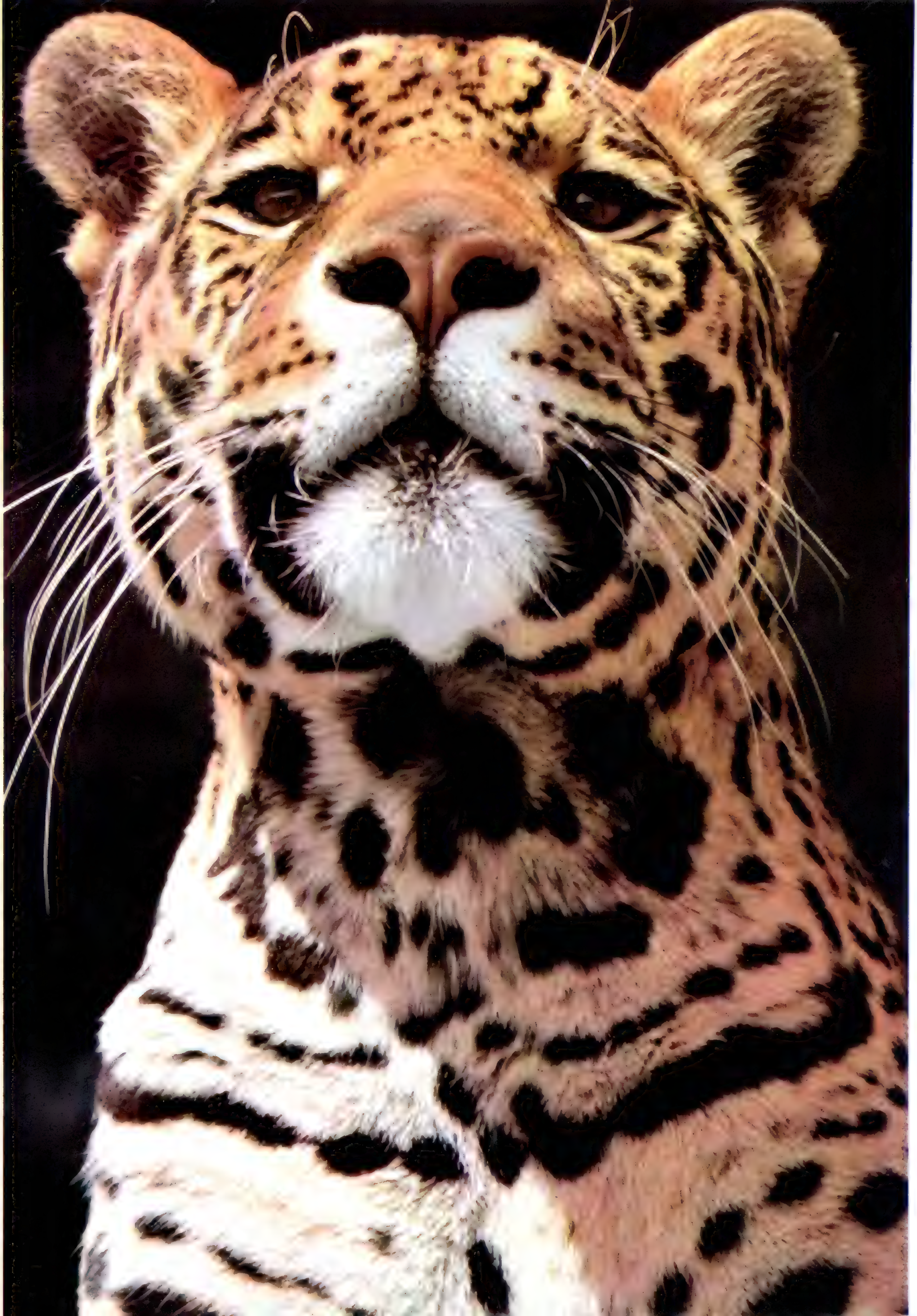
ジャガーはいつも人間から狩りたてられてきたが、それはヒツジの群れや家畜に大きな被害を与えるからである。南アメリカのインディアンたちは、毒矢でジャガーを狩る。ま



ジャガーの子
草むらで無邪気に遊ぶ子ネコとも見える。
四肢を緊張させて、つめをぐっと出している。
こんな、一見意味のない動きが、肉食獣の生活に
必要な動きの練習になっているのだ。
PH. PARBST-RAPHO

ジャガーの子
横腹の斑紋が、まだはっきりせずぼやけている。
木をかじるのは、伸びつつある歯のかゆみのため。
また将来、獲物の肉をかみ切る練習にもなる。
PH. ATLANTIC PRESS

あるジャガーの ネコ科
じっと見下ろす目は冷たく ……
な やいだ ……
……と勘違い……
PH. KLAGES-TILES PHOTO



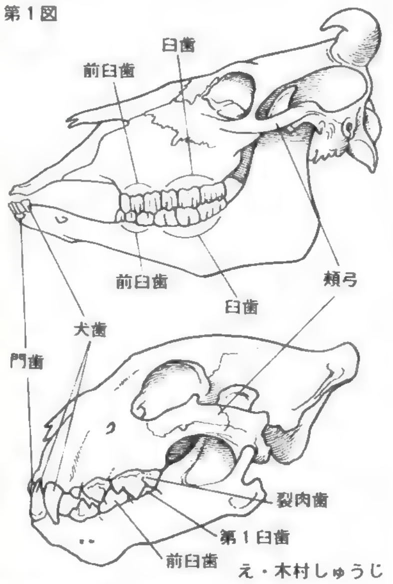
肉食動物の顔

小原秀雄

　肉食動物の歯は2つの働きをもつ。1つは獲物を捕える働き，もう1つは獲物の肉をかみ切って胃で消化しやすいようにする働きである。

　草食の哺乳動物の多くも，草をかみとるのに舌と歯とを使うが，肉食の哺乳動物は，生きているものを捕えて殺すのであるから，自然，草食動物とは歯並びなども異なってくる。（第1図参照）

第1図



え・木村しゅうじ

草食動物（上）と肉食動物（下）の歯
草食動物は門歯と舌で草をかみとり，臼歯でくだく。肉食動物は犬歯のきばで獲物を殺し，裂肉歯で肉をかみ切って食べる

受け口の猛獣たち

　お宅のイヌが口をあけたら，ついでに見ていただきたい。受け口のはずである。食肉類では，一度くわえた獲物が逃げださないように歯並びは受け口になっていて，しかも強いあごの力で上と下から押えている。また，よく伸び縮みするくちびるも，獲物を押える役にたつのである。

　手かぎのようなつめと，強い前肢による一撃が動物を倒すこともある。しかし，なんといっても犬歯であるきばのひと刺しこそが頸動脈を断ち切る致命傷を与えるのである。かつての剣歯虎類が，大型獣を巧みに殺したのは，きば状の長大な短刀にも比すべきその犬歯の働きによるものであった。

食肉類は丸顔

　ネズミを捕えたネコや動物園でえさを食べている猛獣たちを注意して見ればわかるが，口のわきに肉をくわえるようにして，押し切りで切るようにはさみ切っている。

　この際，あごは，はさみと同じように上下にだけ動けばよいのだが，そのあごを力強く動かすには，ささえとなる強い骨と筋肉が必要である。食肉類の多くは，頬弓（きょうきゅう）と呼ばれる，ほおに張りでる骨が大きく発達しており，そこを支点にして大きな筋肉が付着して働く。頬弓が大きく発達すれば，顔は丸くなる。（第2図参照）

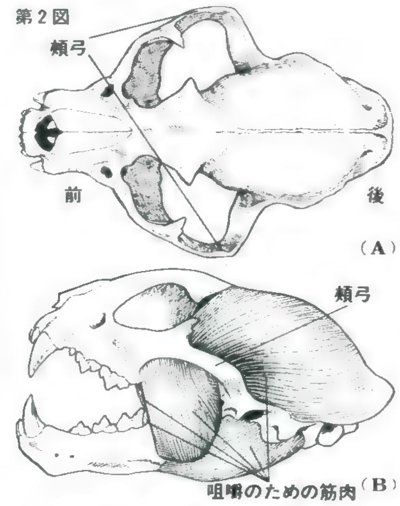
　両眼を使ってものを見る双眼視であるために，両方の目が中央に寄っていており，平たい顔だちになるのも丸顔の一因である。サル類がこの典型である。一方，キリンやウマなどでは，生態上，左右の視野が広くなるように，目は左右に離れてついているので，顔は方形になり長くのびている。

　ネコ類よりいちだんと頬弓が発達しているのがハイエナである。頬弓に付随した筋組織の発達も著しく，頸部の筋肉にまで発達が及び，太い首筋と盛りあがった前半身とで，異様な体形にさえなっている。（第22号本文参照）

強大な裂肉歯

　食肉類が，生肉をかみ切るときに使うのは裂肉歯である。この裂肉歯は，上あごの，いちばん奥の前臼歯（小臼歯）が

第2図



肉食動物の頬弓と咀嚼のための筋肉
肉食動物の頭骨を上からみると頬弓が横に大きく張りだしているのがわかる（A）。
このがんじょうな頬弓が強力な咀嚼のための筋肉の自由な働きを可能にさせている（B）。
え・木村しゅうじ　田中豊美

大きくなったものである。裂肉歯とかみあう下あごの鋭い縁をもつ奥の前臼歯と第1臼歯をも，裂肉歯と呼ぶことがある。

　裂肉歯は食肉類全体の特徴であるが，ハイエナでは，とくに裂肉歯が大きい。ハイエナはきばの大きさでは，ネコ類に劣るが，裂肉歯の強さと大きさでネコ類をしのぎ，その働きで，ライオンなどが食べ残した太い骨をも，かみくだいて食べ，独自の生態的地位を占めているのである。■

カラーページ注

〔注1〕**ヒョウの尾**　動物のからだは，一般化していえば，その祖先から歴史的に受け継いできた形質が現在の生態的条件に適応したものといえる。

　ヒョウの尾も，尾の長かった祖先から引き継いだものであるが，現在のヒョウの生態的条件にどのように適応しているかを考えてみよう。尾の働きの1つは，頭胴に加えて体表面積を大きくし，放熱器としての効率を上げる点にある。

　もう1つの働きは，運動器官としてである。樹上や地上での行動に際して，からだの巧みな動きと対応した尾のバランスのとり方がそれである。サーカスの綱渡りは棒を手に持ってバランスを取りながら渡っていくが，あの棒と同じ働きをヒョウの尾は果たしているのである。

　さらに，待ち伏せや忍び寄りを得意とする猛獣たちは，自然のなかに身を隠すすべを心得ていて，からだの斑紋や色はそのためにつごうのよいようになっている。尾も，その1つの道具として働き，まやかし行為をする。ジャガーもそうだが，とくにヒョウやトラは獲物をねらって伏せつつ近づくときなど，よく尾の先を動かす。

　草食獣に限らず，哺乳類の多くは，臨界距離と名づけられる一定の空間をもっている。これは逃亡限界をふくむ空間で，この距離内にはいられた瞬間に逃げだせば，多くのものは逃げきれる。とするならば，そういう動物を獲物にねらうほうは，相手に気づかれないうちに臨界距離内にはいってしまわねばならない。このとき，相手の動物が視覚にたよっているばあいはなおのこと，長い尾をからだから離して動かせば，動くものに注意が向けられている間に，からだのほうはより獲物の近くに寄ることができる。尾の先が臨界距離内にはいったとたんに逃げだしたとしてもからだはもっと近くに寄っているので，襲う動物にとっては有利になるのである。

　ところで，ヒョウもジャガーも尾の先に輪状斑があり，黒で終わっている。しかし，チーターでは，それが白である。これはおそらく，ヒョウやチーターがたがいに尾を振るとき，種を区別するのによく目だつ標識となるのであろう。この標識は，各体表の斑紋の違いとともに繁殖などに際して各種間のサインとして，識別されているものと思われる。

〔注2〕**黒ヒョウ**　自然界で黒ヒョウが多いのは，東南アジアの深い森林である。住むなお暗いところでは黒ヒョウの体色はいっそう目だたなくなり，環境に適応した体色の1つとなる。ふつうのヒョウの斑紋が，木の葉の葉陰状であるとすれば，黒ヒョウのそれは，暗所そのままである。

　中・南アメリカの森林には黒ジャガーが生息する。熱帯林に生息するヤマネコ類にも黒変種が見られるが，いずれも黒ヒョウと似た環境に生息しており，このような色彩の動物が生き残りうるので，熱帯林には黒変した個体が多いという説もある。

　ほかの地域のヒョウにも，東南アジアのヒョウのように黒変種がかなり生まれるが，みんな陶汰（とうた）されてしまうのであろうか。黒変種が生まれる確率のうえでは，どの地域にも同じ数の黒変種がいるはずなのに，実際はそうではない。ただ，アフリカの森林地帯の一部には，地色の濃いヒョウがいる。

　遺伝的原因から，上記の東南アジアとアフリカの一部以外には黒ヒョウの出現率が低いのかどうか，また適応の結果，黒ヒョウの分布がかたよったのか，まだはっきりしていない。さらに，変異のメカニズムの問題で，古くからいわれていることだが，適応的変異は遺伝しないというが，長いタイムスケールでは，いったいどうなのか，環境条件が遺伝的形質へどのような影響を与えるのか，こういった点も，まだまだわかっていない。

〔注3〕**人間の天敵**　猛獣のなかには人間を捕食するものと，そうでないものとがある。

　ヒョウは常習の人食いになる可能性をもつ種である。ライオンもトラもジャガーも，同じである。一方，チーター，ピューマなどは，同じ猛獣としての資質をそなえながらも人間を襲うことはまれである。この違いは，これらの猛獣の食性の差によって説明がつくであろう。つまり，大型のサルを捕食するかどうか，である。ヒョウはもちろんヒヒを好むし，ゴリラまでも殺す。トラやライオンも，想像以上に大型のサルをきばにかける。ジャガーも，中・南アメリカの森林でサル類を好んで食べる。一方，ピューマやチーターでは，食性の可食範囲が狭く，シカ類や小型のレイヨウ類が主である。

　そのうえ，肉食の猛獣たちは獲物が手にはいるばあいには，その場所にいつづけて獲物を狩る癖をもっている。そのため，特殊な個体が人間を常食するようになるのであろう。

　最近の化石の記録によると，人類の祖先をヒョウがかなり捕食していたという

――→ *



山で撃たれた，雌グマの掌

ヒグマと2人のイノシシ 18

指しゃぶりの秘密

畑 正憲

子グマたちは，明け方になるといっせいに吠えたてた

ウワッ，ウワッ，ウワッ。

一定のリズムで，腹の底から声をしぼりだした。そうなると蜂蜜や黒砂糖などの好物は役に立たぬ。人間の存在を無視して，薄青い窓に向かって吠えたてた。それはまるで，捕われの身を嘆くように聞こえたりして，僕の胸に幾本も細く鋭い針を突き立てた。

その代わり，眠りに落ちる時はあどけなかった。夢遊病さながらによたよたし始める。それからどたりと横になって掌を舐め，鋭い爪をしゃぶる。

時には爪を口の中に残したままあくびをして，閉める時口の中をさして，びっくりしてとび起き，口をとんがらかして怒ったりした。

子グマの表情は実に豊かである。目と鼻面，十分に動くゆとりがある唇に感情の波立ちが如実に現われた。

ヒグマはポーカーフェイスの代表選手だといわれ，僕もそう信じていたが，とんでもない話だ。実に細やかな神経の持主であり，その心の揺れ動きは，イヌよりはっきり顔に現われた。

動物を自分の手で育てない人は，動物の表情について語ると，ともすれば感情移入だ，擬人化だとさげすんだりし勝ちだが，僕はそうは思わない。人間と違って，心の中とは裏腹な表情を作ったりしないので，読みやすい。

ことに飼育する際には，表情の分析をしなければどうにもならぬ。空腹，いらいら，よろこび，激怒，甘え……その把握が何よりも優先する。僕は4頭の子グマを観察しつつ，1つ1つそれを身につけていった。

どれもが，指しゃぶりをして寝つくのは，いわゆる口唇期を卒業していないせいでもあったろうが，クマは随分と長く掌を舐めるようだ。庭先で飼われているツキノワグマも，2頭揃って長々と指しゃぶりをするし，ハナコだって掌を舐めていた。また，山で撃たれたヒグマのメスの右手だって，つやつやとしてやわらかだった。猟師は，その掌を見て，

「これは美味いぞ。穴の中でこいつをしゃぶっていたのですよ」

と教えてくれた。

中華料理では，熊掌は最高の珍味であるが，こういう素材を使えば，ひときわ美味いのじゃないかと思ったりした。

人でも動物でも，何故乳しゃぶりが残るかまだよくわかっていない。僕は横浜で，マ・ミ・ムという同じ年恰好の子ネコを飼っていたが，そのいずれもに，発情期を迎えるまで乳しゃぶりが残っていた。眠る前に，必ずその行動をするのである。

ムは娘と寝ていたが，娘の掛蒲団のカバーに吸いついて手で押したし，ミはこたつ掛けのすそを愛用した。マは変わっていて，オスであるミの腹の毛に吸いついた。まず唾液で腹の毛をぐしょぐしょに濡らし，丸めて，乳首のようにして吸わねば安眠できないようだった。

人の赤ん坊でもそうだ。眠る前におしゃぶりを与える習慣をつけると，幼稚園に上がる年頃になっても，おしゃぶりがなければ眠れなくなったりする。やはりどんべえも，僕らと血がつながっているのだ，そう思うと，咬まれた傷の痛みもうすらぐのだった。

指しゃぶりについて，僕には推論がある。子グマの遊びを見ていると，眠る前に一段と激しくなる。血を流したり，戸板をひっぱがしたりするのはそんな時だ。一種の狂気にかられ，躁期の精神病者のようだ。

どんべえに胸を咬まれるのは，そんな時だった。彼女は女のたしなみを忘れ

ベッドの上で
あどけなく眠るどんべえ



* ——→

ことは確かである。すなわち，南アフリカで発掘された猿人パラントロプスがヒョウに食われていた例が化石で判明しているのである。

化石はごくわずかしか残らないものだが，そのなかに，いま述べたような実例があるというのは，まずかなりひんぱんに起こった可能性のあることとみてよいであろう。パラントロプスは，オーストラロピテクスに近く，学者によってはこれを同じ属とみなしている。したがって，人間の祖先と考えられている200～300万年余り前のオーストラロピテクスも，古代のヒョウの獲物にされていたと考えるほうが当を得ていよう。

では，なぜ最近になってこれらの猛獣がふつうの食物のメニューから人間をはずしたのであろう。ヒョウ，ジャガー，ライオンなどは，今でも人間を食べる種としての可能性はもっている。これを可能性の限界におしとどめておくためには，長い歴史が必要であったろう。つまり，人間の武器の発達による力関係の逆転劇が生物の歴史を背景にして演じられたのである。

オーストラロピテクスの時代から，人類はしだいに分布を拡大してきた。ふつう，種の分布の拡大は，個体数のばく大な増大がその基本になるものだが，その増大の一因としては，天敵に捕食されなくなることがあげられる。人間のほうが猛獣に捕食されず，あべこべに捕食してしまう強さを身につけたこと，それとあいまって猛獣のほうも人間を捕食する習性を修得する機会をもたなくなったこと，これらが猛獣の常食リストから人間をはずす結果をもたらしたものであろう。■

（小原秀雄）

て、ダイビングして僕の胸の肉にぶら下がった。かき傷、丸い歯の傷、僕の胸はどんべえが眠る度に傷が増えていった。その躁状態が終了すると、たわいもなくなって、平和な目つきになってからだをあずけてきた。

娘を育てた時もそうだったことを僕は思い出した。寝る前にぐずって、ぐずって、おんぶをしてゆすったものだ。このむずがりは，赤ん坊によってさまざまな形をとる。縫いぐるみが必要だったり，枕を叩いたり，掛蒲団を噛みさいたりするのだ。

そんな時，僕の娘の手を握ってみた。すると，掌が驚くほど熱くなっていた。

ご家族に幼児がいる方は，ためしに寝入りばなの子供の手をとってみていただきたい。きっとそれは，ハッとするほど熱くなっていることだろう。

どんべえの掌もそうだった。躁状態で暴れている途中で触れてみると，睡魔がやってきている時には，ほの温かくなっていた。そしてからだの力がぬける頃には，掌が火照る感じだった。

元気はつらつと暴れている際には，からだのリズムが違う。ギャロップにしろ階段登りにしろ，四肢のバランスがとれて，稚いながら精気があふれている。

手足の裏も冷たい。鼻先と同じように，さわると氷のようだ。すべての神経が目醒めて，生き生きと活躍しているし，手足の裏が冷たいのは，発汗して体温が発散しているせいだ。

幼児の睡眠前のむずがりには，神経のアンバランスもあるだろうが，体温の上昇も関係がありそうだ。コントロールセンターから睡眠の指令がでると，まず発汗が押えられる。するとおとなの発熱時のように，からだがむずがゆくなり，やるせない気分に襲われるのだ。

おしゃぶりには，その気分を他にそらす作用があるのではなかろうか。まだ目醒めている快感を知覚できる部分に気持を集中させて，睡魔が誘う世界に入っていくのだとは考えられないだろうか。

以上は僕の推論に過ぎぬが，ある程度は役に立つらしく，子グマの生理状態をピタリと当てることができた。

「さあ，そろそろ眠るよ」

「あと10分で目が醒めるよ」

僕は予言者になった。

ところが，その予言が的中するのである。まわりの人がびっくりするのが楽しくて，僕は種明かしをしなかった。

では，眠る前に，どうして人や動物の子供はむずがるのだろう。僕は罪のないどんべえの寝顔を見ながら，更に考えを飛躍させてみた。

すでに一人前に成長した後の掌しゃぶりなどは，単なる残留現象に過ぎぬ。病的でなければ，気にする必要もないし，本来の意味を失っている。

が，山の中，大自然の中ではどうであろうか。眠る前にからだがむずがゆくなって，情緒が不安定になり，親の胸にとびかかったりするのは，愛撫の要求と考えられないだろうか。

——ねんねこよう，ようし，よし。

人の親が子を背負って，右や左にゆするのは確かに愛撫だ。ヒグマだって同じことだ。ハナコの檻をのぞいていたら，母親の上に這いのぼって耳に咬みついたりして，腹の下にかいこまれていた。大胆な推論ではあるが，どうもそう言えそうである。

となれば，話に筋道が立ってくる。哺乳動物の子供は，頼りない姿で生まれてくることが多い。しかも眠ったら無防備である。眠る前に愛撫を要求し，母とのつながりを強調しておくのは無駄にはなるまい。

そんなことを考えながら調教に精を出していると，師匠である間見谷さんから帰宅のお許しがでた。慣らすまで半月滞在しているようにと命ぜられていたのだが，わずか3日で，どんべえが僕を憶えてくれたのである。



間見谷家の人びととあいさつをかわし，どんべえは初めての旅に出た

彼はこう言った。

「シャッポを脱ぎました。ああしつこくてはクマもまいっちまうさ。計画がうまくいくことを祈ります」

「有難うございます。娘と思って育てますから，これから親戚づきあいさせていただきます」

「こちらも望むところです」

どんべえをいただくについては，また古式にのっとった儀式が行なわれた。イクスパイという家紋を刻んだ捧酒棒で，火の神に子グマの健康がいのられ，どんべえは酒を飲まされた。どんべえは目を白黒させて，それでも健気に棒についた酒を音をたてて舐めた。

「さようなら，お元気で」

「また参ります」

どんべえきょうだいは，車の窓ごしにわかれを告げ，僕たちは400キロの旅を急いだ。■

古典動物園　その2

記紀の時代と蛇

池田弥三郎

蛇は，ずいぶん早くから，日本の古典の中に現われてくるが，現実的な要素よりも，空想的な要素が濃い。

奈良県の三輪山の神が，人間の尊い姫君と結婚した話では，三輪山の神は蛇である。姫のもとを訪れて来る神が，夜になると来て，明るくなる前に帰ってしまうので，姫が，お姿を見たいと言うと，それでは明日の朝，櫛の箱にはいっているが，わたしの姿を見て驚いてはいけないと言った。姫がふしぎに思いながら，言われた通りに櫛の箱を見たら，まことにうるわしい「小蛇」がはいっていた。姫は思わず声をあげたので，神は，わたしにはじを与えたといって，大空にまい上がって，三輪山へ登ってしまったという。

三輪山の神の，この話は「日本紀」に書いてあるが，「古事記」の方の話は少し違っていて，訪れて来る男の素性がわからないために，娘の両親が娘に知恵をつけて，ある夜，訪れた男の着物の裾に，糸を縫いつけさせておいた。翌朝みると，糸は，戸のかぎ穴をぬけて，三輪山の神の社まで続いていた。この時，娘の家には，糸が「三わ」残っていた。それでその地を，三輪と呼ぶようになったという。

人と，人でないものとの結婚が，どちらか一方が，もとの姿を見られたために，だめになってしまった，という話は多い。三輪山の話で，小蛇が虚空を踏んで，山上へ登った，というのは，昔の人は，蛇が，龍のようなものに変じて，空中を飛行することもある，と考えていたからであろう。

天に鳴りとどろく雷も，また蛇であったようである。昔，落ちて来た雷が農夫に捕えられて，まさに殺されようとした時に，命乞いをして，その代りに，秀れた子を授けるからと約束した。まもなく生まれた子の頭に，蛇がまといついていた，という。「日本霊異記」にある話だが，蛇の化身として生まれた，ということらしく，それが雷の子なのだから，雷は，この地上では，蛇となって現われるものと，考えていたらしい。

神の系図でいうと，天皇第一代の神武天皇の父君にあたる方は，その母が「八尋鰐」だという。大きな，おそろしい「わに」だったというのだ。この「わに」も，空想の世界では，龍に同じもののようだ。というのは，その女性は，海の底に居住する，海神の娘であったからで，海神は，後には，「海竜王」などと考えられるようになった。

龍は，日本風には「たつ」であるが，同時に龍の字を「たち」ともよんでいる。こんなことから，大刀（たち）と呼ばれた剣も，その霊力が形を示せば蛇であると考えられていたらしい。すさのおの命に退治されたという「やまたのおろち」も，その尾から，「あめのむらくもの剣」が出て来た。「おろち」と呼ばれる大きい蛇と，剣との関係が，おぼろげながら，推測できるように思う。

虹もまた蛇であり，星もまた蛇である。日本には，古くは星の文学がほとんどないが，それは昔の日本人は，夜空にちかちかと光る星は，こわかったのであろう。平安朝の清少納言は，「枕草子」で，「星はすばる星だ」と数えているが，すばる・すまるは，古代の蛇の名である。

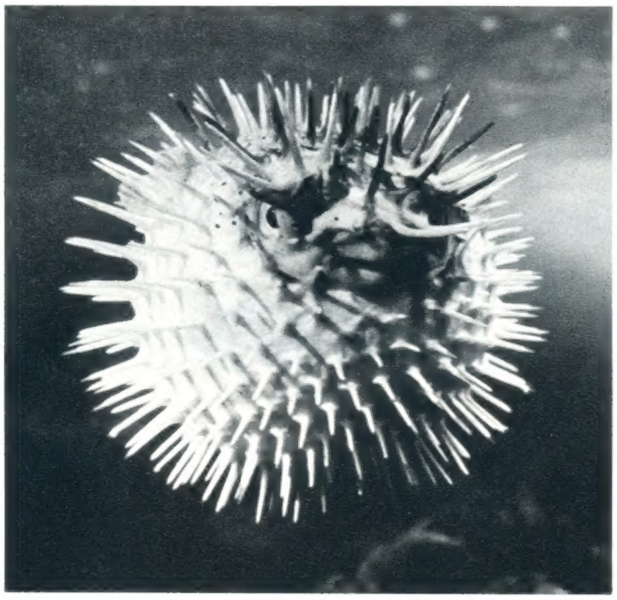
中国では，龍は全く神聖視されている空想動物だが，日本ではそこまで理想化してはいず，ことに，仏教系統の龍の話になると，いい龍もいるけれど，わるい龍もいて，蛇の持っている人に対しての悪い性質も，龍になっても持っている一面がある。女の龍は，特に「龍女」と呼ばれているが，平安朝の京の都でも，都の真中の神泉苑——今の二条城の近く——には，龍女が住んでいたといわれている。平安人の生活の中にいたのである。

蛇・雷・龍・剣，さらに虹・星・龍女と，どういうわけか，蛇は自由自在に，日本のあらゆる古典を舞台にしている動物だということができる。■

海中動物の生活

写真と文　館石　昭

ふくれあがったハリセンボン　水深3メートル　九州・佐多岬にて



3. かわいいおこりん坊

海にすんでいる動物たちは，生存競争に勝ち残るために，みなそれぞれ変わった習性をもっている。それはわたしの興味をそそるので，潜水病にならないために，できるだけ潜水時間を少なくしようとしているのに，つい海中にいる時間が長くなってしまう。

わたしを誘惑する1番手は，フグの仲間のハリセンボンとイシガキフグである。平静を装って泳いでいるときは，なんとか魚の仲間に入れられるスタイルをしているが，危険を感じて防御態勢にはいるや，海水を腹いっぱいにのみこんで，数秒間でまんまるな風船のようになってしまう。そのうえ，からだ全体に鋭い針を立てるので，とてもさわれるものではない。この状態では，どんな大きな魚でものみこんだら腹痛を起こすだろう。

ただこっけいなのは，水面近くにいるとき，水とまちがえて空気を吸いこんでしまうことがあり，腹が上になって浮いてしまい，泳げなくなることだ。空気を吐けば，泳げるようになるのだが，空気と水とが同時に出てしまうので腹が小さくなる。そうすると外敵にのみこまれてしまうので，敵があきらめて立ち去るまでは，太鼓腹に針を立ててさかさのまま，波に揺られているよりしかたがない。

太鼓腹になるしか能がないくせに，好奇心が強く，わたしがもぐっていると，必ずよちよちと泳いで見にくる。

フグ提灯(ちょうちん)は，この種のフグを捕えて背中を裂き，内臓を取りのぞいてゴム風船を入れ，背中を糸で縫いあわせたあと，風船に空気を送り，太鼓腹にして乾燥させたものである。伊豆の八丈島で，波が高くて海に出られないとき，漁師の作るのをまねてやってみたが，生きているときのように丸く作るのは，たいへんむずかしいものだった。

魚の名まえにはおもしろいものが多い。「キタマクラ」はフグの一種で，日本の沿岸にはもっとも多いのだが，猛毒があり，食べるとたちまち仏になって，北を枕(まくら)に寝かされるというところから，この名まえがついたといわれている。

フグの類は，猛毒をもったものが多いが，食べるとたいへんおいしいものもまた多い。古代の遺跡から，人骨にまじってフグらしいものの骨が多く出るという。その人骨は女が多いらしいが，むかしから女は食いしん坊だったのであろうか。

フグにまつわる話は数多いようだ。■

（水中写真家）

ペット相談室



担当
高橋達志郎
（小鳥の病院院長）

〈問〉　手乗りブンチョウと手乗りインコの育て方を教えてください。

（北九州市・三田信夫・会社員・28歳）

〈答〉　ブンチョウとセキセイインコは生まれてから15～20日ぐらい，ボタンインコ類は3,4週間ぐらいのひなから飼育するのが適当です。あまり早く親鳥から離して差餌(さしえ)を始めると，盆栽的な小さな鳥に育ってしまい，また，おそすぎると人を恐れて，えさを与えても食べてくれません。羽毛がまだふじゅうぶんなころなので，保温に気をつけないと，えさの消化力が低下します。

差餌に用いるえさはアワ玉で，与える量は鳥の数に応じ，1回量を小さなべにとり，かぶるくらいに水か湯を入れ，ブツブツいうまで火にかけます。この際，ひとつまみのかたくり粉を入れ，少しとろみをつけてやると，差餌の際にえさがボロボロこぼれなくてやりよいでしょう。

インコ類は，やけどをしない程度に，熱いうちに与えたほうがよく食べます。火を通すのは，消化を助けることなのです。

このようにして，ブンチョウの場合は，竹べらや先の丸いピンセットで，インコ類の場合は，スプーンか指を使って与えるとよいでしょう。

差餌の回数は，1日につきブンチョウの場合は，朝，昼，夕，晩と4回，インコ類には，朝，昼，晩と3回，1回ごとに満腹になるように与えればじゅうぶんです。

以上の回数を，1週間ごとに1回ずつ減らしてやると，ひなはおなかがすいて，こぼれているえさを拾って食べるようになってきます。そのころから，かごの中に直接に皮つきのえさをまいておくと，インコ類は比較的早く，ひとりでえさを拾って食べるようになるでしょう。

ブンチョウの場合には，今まで与えていたアワ玉の水分を少しずつなくしていき，別の容器に入れて置いてやると，だんだんひとりで食べるようになります。

成長して，飛べるようになってくると，小鳥はおもしろがって部屋の中を飛びまわります。このときにあまり追いかけまわさないようにして，なるべく手に飛んでくるまで待って，毎日5分でも10分でもいっしょに遊んでやることが必要でしょう。

このころから，インコ類には何か名まえをつけて，毎日呼んでやると，そのうちに自分で名まえをいうようになります。そのほか，簡単なことばを繰り返し話しかけていると，自然に覚えていきます。■

仲間のひろば

百科にはいりこんだサチ

「動物百科」の11号を開いて，わたしは，はっとしました。なぜなら，いなくなったはずのサチが，そこでじっとわたしを見ていたからです。

サチはわたしの飼っていたモルモットの名まえです。サチはわたしが，2年前デパートから買ってきて，そのときすでにおなかに赤ちゃんがいたらしく，みるみるうちに鏡餅(かがみもち)のようにおなかがふくれて，3か月めの朝，3回でんぐりがえしをして，3匹の赤ちゃんを生みました。赤ちゃんは元気で育ち，もう少しで一人（匹）まえになるところだったのですが，何が原因でか，次々と死んでしまいました。それでもサチは，落胆するようすもなく，毎日野菜を食べては，キューキュー鳴いていました。そしてこの4月，大きなトラックに乗って，わたしたちといっしょにすみなれた東京を離れ，この京都へやってきたのです。

京都の家は庭が広く，毎日庭に出て，ひなたぼっこをしながら，草を思う存分食べるのが，サチはとても好きでした。その日もいつものように庭に出して，ちょっと食事をして，いってみると，どこにもいないのです。縁の下にでもはいったのだろうと，ペキニーズのスピカににおいを追跡させると，草や木のあいだを捜しまわったあげく，塀(へい)に立ちあがったのです。ネコにとられたことは，まちがいありません。

これは完全にわたしの責任です。深い後悔と悲しみにくれながら，その日発売になった「動物百科」を開いたのです。そこには，茶と白の毛の配色や，顔の表情までサチそっくりのモルモットがいました。それは，サチが草むらを歩きまわっているうちに，ふとこの本の世界にはいりこんでしまったようでした。ただの偶然だとはとても思えないのです。

またこの本には，わたしが今までに飼ったことのある，ウサギやリスなども顔を出して，私を慰めてくれました。わたしはサチのかわりに，この「動物百科」を，いつまでもたいせつにしていきたいと思います。■

（京都市・鮫島しのぶ・20歳・家事手伝い）

裏表紙説明

セノニンファ・ポンフィルス　和名がなく，学名 *Coenonympha pomphilus* で呼ばれているこのチョウは，ジャノメチョウ科に属する。ヨーロッパの森林や山岳地帯の草むらに広く分布しているが，日本にはいない。

まるみを帯びた羽には，黒，灰，白などの，目だたない眼状斑（がんじょうはん）があり，全体の色調としては，茂みのなかに溶けこめる保護色になっている。地表近くを，かなりの速さで飛びまわり，空高く舞いあがることはまれである。

ジャノメチョウの仲間は，日本でもヨーロッパでも，比較的ひんぱんに見られ，ウラナミジャノメ，ヒカゲチョウなどの，茶色っぽい，モンシロチョウくらいの大きさのチョウが，よく知られている。

アザミのとげにうまく止まっているこのセノニンファ・ポンフィルスも，やがて卵を生み，夏が終わるころには短い生涯(しょうがい)を閉じていることであろう。■

Ph. Klein-Atlas Photo

ライオンに襲われる馬　テオドール・ジェリコー

テオドール・ジェリコーは，フランスのロマン派の画家たちのなかでも，最もロマン派的生涯を送ったといってよいだろう。ナポレオン戦争の激動期に，彼は龍騎兵の士官として従軍し，戦争の経験も持っているし，画業に専念するようになってからも，乗馬だけは忘れず，ついに荒れ馬から落馬したのが原因で，33歳の若さで世を去ってしまった。

したがって，その作品の数は決して多くはないが，ロマン派の最初の烽火と言われる大作「メデューズ号の筏」のほか，特に動物をモティーフとした作品を沢山残している。

その動物の扱い方も，ジェリコーの場合，ロマン派的な激しい気性をよく示している。彼が描き出すのは，荒れ狂う牛とか，競馬場で疾駆する馬とか，この作品のように闘争中の動物とか，いつも激しい力のみなぎる，ダイナミックな構図のものがほとんどである。この「ライオンに襲われる馬」は，もともとはイギリスのロマン派の画家ジョージ・スタッブズの構想になる，似た構図の作品にヒントを得たもので，ジェリコーはおそらく，版画によってスタッブズの作品に接し，そこに，自己の霊感にふさわしい主題を見出したものであろう。

なお，研究者によっては，この作品はジェリコー自身の筆になるものではなく，弟子か仲間の画家たちの作品ではないかと考える人もいるが，いずれにしても，ロマン的な力動感の美しさは，見事に表現されている。■（高階秀爾）

1820年ころ　油彩　カンバス　54×65センチ　ルーブル美術館



第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

❶概説 I　生態学，自然保護
❷概説 II　動物分類学，生物学的環境
❸霊長目　ゴリラ
❹霊長目　チンパンジー，オランウータン
❺霊長目　テナガザル，オナガザル
❻霊長目　カニクイザル，ヒヒ
❼霊長目　キヌザル，オマキザル
❽霊長目　メガネザル，キツネザル，アイアイ
❾食虫目　ツパイ，モグラ，ハリネズミ
❿翼手目，皮翼目　コウモリ，ヒヨケザル
⓫齧歯目　ヤマアラシ，チンチラ，ミズブタ
⓬齧歯目　トビネズミ，ヤマネ
⓭齧歯目　家ネズミ，野ネズミ
⓮齧歯目　レミング，ビーバー，ハムスター
⓯齧歯目　リス，ムササビ
⓰齧歯目　ウサギ
⓱食肉目　チーター，ライオン
⓲食肉目　トラ
⓳食肉目　ヒョウ，ジャガー
⑳食肉目　ピューマ，ヤマネコ
㉑食肉目　イエネコ
㉒食肉目　ハイエナ，マングース
㉓食肉目　ジェネット，カワウソ
㉔食肉目　スカンク，アナグマ
㉕食肉目　テン，クロテン
㉖食肉目　ミンク，イタチ
㉗食肉目　パンダ，アライグマ
㉘食肉目　マレーグマ，ホッキョクグマ
㉙食肉目　ヒグマ，ツキノワグマ
㉚食肉目（畜犬）　盲導犬，警察犬ほか
㉛食肉目（猟犬）　グレーハウンド，セッター
㉜食肉目（番犬）　コリー，セントバーナード
㉝食肉目（ペット犬）　ニホンイヌ，チワワ
㉞食肉目（野生犬）　ディンゴ，リカオン
㉟食肉目　キツネ，ホッキョクギツネ
㊱食肉目　オオカミ，コヨテ
㊲食肉目　アザラシ
㊳食肉目　セイウチ，オットセイ，トド
㊴奇蹄目　サイ，バク
㊵奇蹄目　ウマ概説
㊶奇蹄目　サラブレット，ポニー
㊷奇蹄目　ロバ，ラバ，シマウマ
㊸岩狸目，長鼻目　イワダヌキ，ゾウ
㊹偶蹄目　カバ，ペッカリー
㊺偶蹄目　イノシシ，ブタ
㊻偶蹄目　ヒツジ，ビッグホーン
㊼偶蹄目　ヤギ
㊽偶蹄目　ヤギ（飼育種）
㊾偶蹄目　レイヨウ
㊿偶蹄目　ブラックバック，クロレイヨウ
(51)偶蹄目　ダイカー
(52)偶蹄目　アフリカスイギュウ
(53)偶蹄目　ウシ，コブウシ
(54)偶蹄目　クードウ，プロングホーン
(55)偶蹄目　キリン，オカピ
(56)偶蹄目　トナカイ
(57)偶蹄目　シカ
(58)偶蹄目　ラクダ，ラマ
(59)貧歯目，有鱗目，管歯目　アリクイほか
(60)海牛目，鯨目　ジュゴン，ナガスクジラ
(61)鯨　目　イルカ，マッコウクジラ
(62)有袋目　カンガルー，コアラ
(63)有袋目　バンディクート，フクロネコ
(64)単孔目　カモノハシ，ハリモグラ

以下(65)～(128)　鳥類　(129)～(144)　両生類，爬虫類
(145)～(160)　魚類　(161)～(192)　昆虫類，甲殻類

世界動物百科　通巻19号　昭和46年7月18日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



セノニンファ・ボンフィルス　説明 30ページ

雑誌コード　0633